

俳句雜誌

令和五年九月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六卷第九号

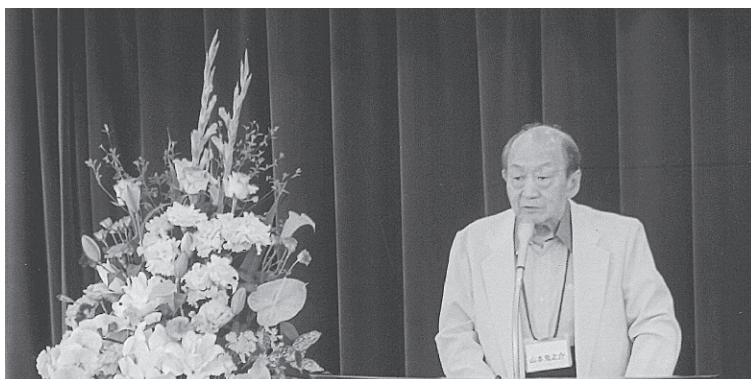
水 明

2023 9月号



水明全国大会

令和五年六月二五日
(於さいたま共済会館)



主宰と各賞受賞者の皆様

水 明

第1116号

— 華の一句 —

梅 雨 晴 や 弓 手 に 残 る 指 輪 跡

町 野 広 子

世界的な気象異変によるものか、近年夏の日中の暑さを解消してくれる夕立や梅雨の長雨が無くなったように思うが、そうは言っても梅雨の最中の晴れ間は気持よく心も晴れる。本句は、近年夫を亡くされたのかと推察しうる俳句であり、若干の甘さは拭えぬものの、指輪跡のある左手を、馬上の武者が弓を持つ弓手と表したことで、節度のある身辺俳句となった。

(鬼之介・推薦)

水明

令和5年
9月号

華の一句

濃緑の帽 (作品)

鎌倉散策 (近詠)

夏館 (近詠)

百尺竿頭 ※主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 ※季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

全国大会の記

全国大会 兼題句入選句

季音賞作家の頁 (私の三句)

山本鬼之介

石井喜恵

五明 昇

五明 昇

檜鼻ことは

星野和葉 茂木和子
森本早苗 ほか

梅澤佐江 大場順子
松井由紀子 ほか

青木鶴城 檜鼻ことは
日高道を ほか

水野星闇

網野月を

保坂翔太

近藤徹平・大塚茂子



八月号の巻頭句

水明集

池田珪子 越田栄子
清水桂子 ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水琴窟 (水明集七月号鑑賞)

池田雅夫

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

70

俳誌望見

染谷風子

52

句集喝采

曲淵徹雄

79

山紫集

73

水明夏行

日高道を・染谷風子・保坂翔太

80

水明例会報・各地句会報

83・86

りんどう忌

91

風声・発展基金御礼

92・93

後記

94

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

濃緑の帽

山本鬼之介

噴水や先づはウインナーワルツから

去ぬる気配なき姑や夏の夕

昼寝する小言幸兵衛その夢は

憧
る
る
ひ
と
の
夏
帽
深
み
ど
り

「岸
壁
の
母
」
の
が
ん
ぺ
き
土
用
波

ブ
テ
イ
ツ
ク
の
シ
ヤ
ツ
タ
ー
上
が
り
夏
旺
ん

咲
き
了
は
る
ま
で
の
花
数
さ
る
す
べ
り

自
転
車
の
巡
査
を
招
く
稲
の
花

鎌倉散策

石井喜恵

炎帝に龍が眼を剝く天井画
甲羅干す亀のまばたき半夏生
夏落葉七百年の養生木
若竹の伸びて陽の透く空広し
老鶯や花柄表紙の御朱印帳
吾が影を我が踏み行く梅雨晴間
梅雨満月高層ビルの歪みかな

大船に住む次男が小宴を催すと云うので、娘の家族共々行くことに、正月以来の全員の顔が揃った。青春まつ盛りの孫たちの前では少し控え目な私。

翌日は娘二人と連れ立って鎌倉五山二位の円覚寺、竹の庭で知られた報国寺を中心に散策に出掛ける。辛い猛暑日の合間を縫ったように気温も低めで心地良かった。それにしても外国の人達の多いのには喫驚。そして八十余年生きてきて、亀の瞬きをこんな近くで判然と見たのは初めてで感激してしまった。少し涼しくなったら未だ行きたい所は沢山ある。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

六月号

葉桜の道をゆるりと歩き神

「歩き神」は人をそぞろ歩きや旅に誘い出すという神で、後白河法皇の編んだ歌謡集『梁塵秘抄』に「指の先なる拙神（てづつがみ）、足の裏なる歩き神」の一節がある。風薫る葉桜の道を散策していると、歩き神にでも誘いだされたような不思議な感覚に包まれ、身体がゆっくりと揺れ動いてくる。多忙な日常の中に得た束の間のゆとりが嬉しい。

健気よな卯波の磯を一輛車

沖に卯波の立つ海岸線を健気に走るローカル線には、そこはかとない旅情が漂う。鉄道ファンが選ぶ「海沿い絶景鉄道十一選」は、①五能線②江ノ島電鉄③指宿枕崎線④三陸鉄道リアス線⑤山陰本線⑥氷見線⑦日豊本線⑧伊豆急行線⑨丹後鉄道宮舞線⑩函館本線⑪予讃線——。作者が詠んだ海辺はどのあたりだろうか、読者の心情を揺さぶる一句だ。

水前寺清子の一步夏の星

水前寺清子が一九六八年にリリースした『三百六十五歩の

マーチ』は高度成長期の時流にマッチし、日々努力する日本人の応援歌として国民的人気を博した。歌詞には、どのような苦難を前にしても幸せに向かつて一歩ずつ着実に歩いていこうという強いメッセージが込められており、暑い夜に星々を仰いだ時に感じる心身の清涼感にも通じるものがある。

光悦寺垣の牡丹に目礼す

光悦寺がある洛北鷹ヶ峯一帯は、徳川家康よりこの地を与えられた本阿弥光悦が移り住み広大な芸術村を作った所だ。光悦寺垣は垣根の高さが曲線を描き、透かし垣が庭に動きを加える独特のもので、ここに牡丹の一景が添えられれば思わず目礼したくなるのも頷ける。ちなみに松江市の由志園、横浜公園内の彼我庭園では光悦寺垣と牡丹の共演が大人気。

所番地の末尾の「上ル」とつき雨

京都市街は平安京の条里制の名残から、南北の通り名と最寄りの東西の通り名（通を省く）を言い、特定したその地点から「上ル、下ル、入ル」のいずれかを付け加えた住所表記になっている。北へ行くことは「上ル」、南へは「下ル」、東へは「東入ル」、西へは「西入ル」。五月雨の中を目指す晴明

神社の住所は「京都市上京区堀川通一条上ル」となる。

七月号

「北上夜曲」歌ひ昭和を夏の夜

「匂いやさしい白百合の」と日本中で愛唱される「北上夜曲」。この甘く切ない青春の愛唱歌は一九四一年二月、軍歌行進曲全盛の中で十代の若者によって生まれ、口から口へと密かに歌い継がれ、六〇年代の中頃に全国の歌声喫茶で空前のブームとなった。曲として最もヒットしたのは多摩幸子 & 和田弘とマヒナスターズ盤で二〇〇万枚を突破。昭和の夏の夜の思い出として今も万人の心を揺さぶり続けている。

飛魚の最長不倒距離いかに

飛魚はトビウオ科の魚で、強大な胸鰭で海面を滑空するものの総称、またはその一種。体長三十五センチ前後、蒼白で日本では伊豆七島から沖縄の西日本に分布する。海面近くを泳ぐ表層魚のため大型の魚に捕食されやすく、飛ぶことで敵から逃れる術を身に着けたという。ちなみに飛魚の滞空時間は四十二秒、最高四〇〇メートルの記録があるが、飛行技術が進化した過ぎたせいで、最近では鳥に食べられていくとか。

里山の穴場へ向かふ螢狩

「紅葉狩り」という言葉と同じで、「螢狩り」はホタルが闇

の中で微かな光を放ちながら飛び舞うさまを愛でることをいう。ホタルは深過ぎない川底に砂や礫があり、餌となるカワニナ（巻貝）のいる穏やかな清流に多く棲みつくが、天然のホタルが生息できる環境は年々減少している。梅雨入りが話題になり出すと待ち焦がれたホタルの季節、かねて目を付けておいた里山の穴場へと向かう作者の胸が弾んでいる。

棕櫚繩のきまる袖垣さつき雨

袖垣は門や建物の脇に添えて造った幅の狭い垣根で、竹や木枝を材料とし、目隠しのため、また庭に趣きを添えるために設けられる。垣根を造る時には棕櫚皮からとれる黒褐色の繊維を縫り合わせた棕櫚繩が使われることが多く、水に強く腐らないという利点がある。支柱に棕櫚繩の「いぼ結び（男結び）」がきっちりときまった袖垣は見るからに凛々しく、折からの五月雨に映えて美しい。

藍染のTシャツ父の日を飾る

飛鳥時代に中国から伝来して以来、日本人の生活に深く根付いてきた「藍染」は、武士の時代には「縁起の良い色」として好まれ、明治には海外から「ジャパン・ブルー」と称えられた色であった。体に優しく環境にも良い「天然」の良さは、便利なものが溢れる時代において、よりその価値と魅力が見直されている。掲句からは、父の日のプレゼントに藍染のTシャツを贈られてご満悦の作者の表情が窺われる。

ゆずり葉

◆季音七月

檜 鼻 ことは

群れて咲く紫蘭に迷ふ花鉢

由良ゆら女

紫蘭は古くより親しまれている花。「紫蘭咲いていささか岩もあはれなり」と白秋が詠んでいるよう、日向でも日陰でも一度植えてしまえば、あとは放っておいてもよく育つ。紫色の花は美しく葉もまた美しい。生け花にすればまことに端正な姿で室内を彩る。紫蘭だけ生けても紫蘭の葉を他の花と組み合わせて生けてもよき風情。

五月ともなれば紫蘭は群れるように咲き始め、生ける時はやはり、いい形いい大きさのものを使いたい。紫蘭をより分け、目当ての紫蘭に花鉢を入れるのは、迷いながらも早朝の楽しみなのである。

夏めくや蔓巻き上がる鉢三つ

鳥羽和風

空青く、陽射しが眩しく感じられるようになると木々の緑も色鮮やかになり、草花もところせましと咲き始める。冬の

間は寂しかった家の庭にも、季節の移ろいを告げるかのように草花が咲き出す。

早朝、庭を一巡りしながら、花を愛でるのが最近の日課。地植えているものがあるが、鉢植えもいくつもあり、いつものごとく覗いていると、みな無事に育っているようだ。夏の庭には、蔓性の植物の緑がよく似合う。朝な夕なに、伸びてゆく蔓の様を眺めて楽しんでる今日この頃である。

鑑真の超え来し海や卯月波

大場順子

「現世にこせこせ生きてるのが厭になったらここに来るのがよい」と堀辰雄が述べた唐招提寺の創建は、七五九年。

鑑真が日本の僧の招きにより最初の渡日を試みたのは七四三年、以来、密告や妨害、または航海途中の暴風雨により渡日を阻まれ、数回の試みのあとやっと屋久島にたどり着いたのは七五三年十二月のことであった。しかし、屋久島より太宰府を目指すも遭難。幾度の困難を乗り越え、あくる

七五四年二月、ようやく奈良に到着する。渡日を覚悟してより十年の歳月がたつていた。

旧暦四月のころは、天候が不安定で波が立ちやすく、波の白さを卯の花の白さに例え卯月波と呼ぶと言うことだが、揚句の波は、天平の歴史に思いを馳せる卯月波である。

酒蔵の崩れしままに花卯木

井上燈女

卯木は空木とも書き、その種類は多く、一般には〇〇ウツギと呼ばれる。莖や枝を折ると中は空洞で、その名の由来に納得する。私の住まいしているところでは四月ともなると「谷卯木」が淡いピンクの花を咲かせ、山際の道を彩る。

三月十一日に発生した東日本大震災。宮城、岩手、福島の大震災においては民家だけでなく多くの企業が被災した。被災した酒蔵もいくつもあったと聞く。あれより十一年の歳月が過ぎ、復興も進んではいるが、まだまだ完全には言えない。作者の詠んだ酒蔵がどこの酒蔵か知る由もないが、卯木の花が咲けば、梅雨入りが近い。何かしら静かな抒情を感じる一句である。

押鮓や一つ覚えの旅土産

横山君夫

土産を買うのも旅のたのしみのひとつ。最近では物流が発達し、通販でいろいろなものが買えてしまうのだけれど、やはり、たとえ同じものであっても当地自慢のものを、お店の人

と語りながら買うのは嬉しいし、多分、お土産を貰った人も喜んでくれるはず。

一つ覚えとあるからには、きっと鉄板の美味しさなのだ。「押鮓」と聞くと、すぐに富山の「鱒寿司」を連想してしまうのだが、富山なら「白えび」の押し寿司も美味しいし、石川なら笹寿司もお勧めの一品…などと、妄想が膨らんでしまう。さて、一つ覚えの旅の土産をいただいで、自宅で一献なんて、最高である。

色褪せしキネマ旬報麦の秋

染谷風子

「キネマ旬報」、懐かしい雑誌の名前だ。学生の頃はよく買っていた。今も「キネマ旬報」は現役で、二千十九年七月には創刊百周年を迎えたということだ。

ところで、原田マハの小説「キネマの神様」は、競馬、麻雀、映画が大好きで気持ちのよいほど無責任なゴーチャンこと、丸山郷直とその家族の物語だが、映画雑誌のホームページにゴーチャンが映画の評論を書くところから物語の後半が展開する。「淀川長治さんのような評論こそが、映画ファンの心にもっとも響くのもかもしれない。単純なように受け止められるが、作品を理解していないと、あれだけ流暢な表現は出てこない。解釈ではなくて理解だ。加えて、映画に対する深い愛情がなければ…」の一節が心に残った。「色褪せしキネマ旬報」…きつと思いい出に残る映画の号であったのだろう。

季 音 雪



刻止まる 星野和葉

前に行く酔歩に見覚え梅雨の夜
睡蓮の池に友待つ刻止まる
雑魚寝てふ山小屋の態青き嶺
白鷺の一步一步の歩みかな
番なる白鷺思惟の態をして

ダリア 茂木和子

夏館螺子を巻き足す大時計
ダリア切るあとの空白手の火照り
唇の何か云ひたげ緋のダリア
落日を見てゐてダリア見失ふ
負けん気の子にとりつきし夏の風邪

夏の霧 森本早苗

丹田に響く一発梅雨明くる
夏の霧六甲連山掻き消しぬ
花合歓の長き睫毛やバス潜る
アナベルに溺れてをりぬ黄金虫
老鷺の音に癒さるる今朝の庭

梅雨 矢作水尾

梅雨晴間沖に白帆が花のごと
郭公や観音堂の千社札
青芒少年海へひた走る
梅雨の月岩壁に寄る浚漕船
紺暖簾そよりとませぬ日の盛

花火 山中みどり

揚げ茄子の煮浸し辛口大吟醸
冷酒のとろり濃紺江戸切子
打上げの花火台船夜を待つ
緩む帯締め直しやる花火の娘
花火果て闇深くなる隅田川

風の音 柚木治子

公園の切株に待つ朝曇
白うちは独り将棋の奥座敷
染分けの謎のすずやか片白草
サインする如く夏蝶舞ひ降るる
明日の元気祈りて寝入る遠花火

大阪の祭 由良 ゆら女

大川の川面をわたる祭笛
眼前にずいと神輿の担ひ棒
人に酔ひ湯引き鱧など小上りに
大阪の祭ソースの焦げてこそ
川渡御に雑魚のねむりのままならず

片瀬江ノ島界限 網野 月を

雲の峰片瀬江ノ島龍宮舎
父母の顔を知らずに蛭蚌がごみの子
磯浦や人の腥臭嗅ぎ分ける
弁天の肌を潤す夏の潮
夏の花マストは白でありぬべし

夏 小景 石井喜恵

麦秋の雨を誘ふか泣き羅漢
庭石のぬれて夕べの白牡丹
郭公の声の合間の静寂かな
朝の雨降り残したる鴉浮巢
夏霧にまかれ山姥出てきさう

日の盛 石山 かつ子

鋏形をとる父さんの肩車
日盛や桧山杉山鉾正す
わつさわつさと犬が穴掘る日の盛
相席は陸前訛涼会
夏の花見渡す丘に林火匂碑

呱呱の声 大橋 廸代

退院荷の五個を一手にアマリリス
今日よりはちびりにすべし冷し酒
魁くは呱呱の声なり朝の蟬
一匹は蓮の蒼に入りしまま
水馬は飛んで蜻蛉になるつもり

薄情け 大村 節代

夏座敷物言ふ花の薄情け
物売りの歌舞伎踊よ絹団扇
岩風呂や遠雷を聞く山男
射程距離あけて白鷺舞ひ降りる
白鷺や近くて遠し故郷は

積ん読 小倉 倭子

川沿ひの風に彩なす青芒
少年の声透く丘の青芒
日盛の部屋に積ん読膨張す
車座に修行苦行や日の盛
日盛の石に躓き旅終はる

虹 菊池 ひろこ

親族会虹おく空の常ならず
朝虹の揺れ見逃さず風見鶏
夕陽射す書斎の棚の紅ギヤマン
微温湯にギヤマン浮かせ宴果てり
移転後の徒歩通勤や日日草

ようそろ

五

明昇

冷

奴

椎野

美代子

滴るも噴くも大地の息遣ひ
沖暗し黒南風を衝く連絡船
オーシャンビューに風が馳走の夏館
大南風島に往古の大鎧
レガッタの櫂のようそろ雲の峰

母郷いま灯ともし頃や冷奴
冷奴烟るばかりの長寿眉
長寿箸少しびつこに冷奴
冷奴落こちさうな泣き黒子
冷奴すぐにくづるる又逢はむ

海霧が呑む

境

延昭

梅

雨

晴

島津

初

花

決闘の剣にはなれず青芒
陸揚げの舩忙しや土用風
島つなぐ大吊橋を海霧が呑む
石を切る発破の音や夏の霧
南風吹く三個括りのツナの缶

梅雨晴の身に溢るるや師の一句
高層のビュツフエに佇む朝曇り
緑陰に擦り寄る鳩の瞳は赤し
緑陰や一気に落とすラムネ玉
鐘楼は高し梅雨晴の川越よ

夕 焼 鈴木康世

大夕焼に吞まれて行きてそれつきり
揺り椅子に富士の夕焼昏るるまで
夕焼や胸に置く手の重きかな
書に飽きて見上ぐる向かう大夕焼
夕焼の富士へ飛ばすや紙飛行機

梅 雨 晴 田寺玲子

ギヤマンの盃へ一粒さくらんぼ
梅雨明けの瀬戸の海航く巡視艇
梅雨明くる磯波眼下に磯料理
蒼天へ競ふ噴水須磨離宮
蛇の衣 天空の城 闇深し

貝 風 鈴 十倉和子

貝風鈴遠き潮騒恋うて鳴る
太極拳涼しき声にはじまりぬ
大瑠璃の声に聞き入る鑑真像
雨蛙鳴き立て夕闇降りてくる
雨蛙物干竿で予報官

浦和道中記 鳥羽和風

青柿や只今通過岐阜羽島
張り込んで近江牛食ふ夏の昼
「おいお茶」月をが選の夏一句
拍子木で主宰が締むる夏祭
散策の小江戸川越うなぎ飯

血 縁 永野史代

風 涼 し 波多野寿子

戦なし麦秋遙かまでつづく
麦秋の匂ひ懐かし父母あらば
擬宝珠咲かせし隣人はフェミニスト
梅青し血縁しかと思ひをり
タイタニック号沈む海底梅雨ふかし

夕立止み一陣の風通りゆく
どこからか子等の歓声大夕焼
うす紅となりて目覚めの月見草
追憶や姑のゆかしさ濃あぢさゐ
稽古了へ庭に出づれば風涼し

夕 風 西山貴美子

マスクメロン氣息も添へて渡さるる
子子のあたま重たく生まれけり
夕風をいの一 番に釣忍
冷奴乙な科白に惹かされて
ゼリー一掬平均台が揺れてゐる

☆

☆

季音月

予約席

梅澤佐江

篠突く雨に鳩の浮巢のよるべなき
日の盛り上ル下ルの京の町
花莫塵の藍に白波立つ心地
月涼し陸奥紙で恋文を
夏の夜の最上階の予約席

大夕焼

大場順子

大夕焼我青春にヴィヴィアンリー
青梅もぐ翡翠に染まる指の先
真夜に覚め水音涼し京の宿
梅雨晴や万物に色戻りたる
総帆に南風はらませ日本丸

夏雑詠

松井由紀子

夫の座に置きたつぷりのアイスティー
遠雷や難問パズル解き急ぐ
年ごとに母似となりて藍縮
蕊摘めば鬼百合ふいに盲ひけり
聖地訪ふやうに父発つ岩魚釣り

残暑今

井上燈女

片陰へどかつと置かれ大荷物
農に生き農に徹する暑氣払
帰省してビル遠景に置きし子よ
鬼やんま夫の貌して低く飛ぶ
残暑今奥に奥ある大藁屋

御座敷へ

正木萬蝶

溶けてゆく麒麟の網目梅雨じめり
梅雨夕焼常世の国を垣間見る
御座敷へ抜衿ゆかし夕焼空
付添ひて眠りの浅き朝の虹
喜びも哀しみも泡ビール干す

白日傘 森川 義子

帰国子の着陸を待つ白日傘
瀬戸内の潮路遙かに日の盛
月涼し父の肩借り一輪車
三つ編みの巫女の黒髪神涼し
沖繩の消印にほふ盛夏かな

白南風 高島 寛治

夏霧に濡れて渚を魚のごと
天道虫今朝の散歩の土産とす
日の盛り息潜めたる旧街道
白南風や渚を走る介助犬
母の忌や朝顔に水惜しみ無く

汽笛の尾 丸山 マスミ

山よりの風も過客の夏館
夏の霧馬の背越えを行く歩荷
汽笛の尾沖に揺るるや夏の霧
日盛や人影の無き船溜り
日盛や陰を無くせし馬頭尊

滴り 松宮 保人

風吹きて雨に事なき青田道
青柿や墓地改修を振り返る
奥山の滴る処供養塔
滴るる素掘りの隧道抜けて海
説明はいらぬ花火の大競演

初秋 池田 雅夫

八月の子等のびのびと駆け回り
初秋の山内濡るる多宝塔
静かなる中のささめき靈迎
狂ほしく鳴きじやくるなり秋の蟬
朝顔や闇のほどくる音に覚め

花莫塵 山田 美佐尾

花莫塵の赤い花摘む女の子
花莫塵や四方山話夜が更く
青田の中に先祖の墓の隠れをり
梅雨明けて岩場鎖の振れ解く
客寄せのビールの泡の黄金色

寒狭川 松本光子

早朝の山路に聞きし仏法僧
仏法僧聞きつ会釈を若き僧
清流に名残りの築も寒狭川
築に幣無念の武将や保存館
竹さやぎ夏越の祓一番星

会話 町野広子

西方の晴れて止む雨遠郭公
にんげんに会話てふ武器夏来る
浜までは一本道の夏館
梅雨晴や弓手に残る指輪跡
食細き母に白玉小さくして

花木権 渡辺舍人

一樹点在白々をほこれる花木権
天文部の夢中の黄色月見草
物断ちす冷やしトマトのある幸に
亡妻と紛ふ人来る片かげり
旅客機の消ゆるまで追ひサイダー飲む

馬の鼻 内田恵子

夏の霧ぬうつと迫る馬の鼻
テトラポッドは恐竜の骨夏の霧
天道虫ネイルアートは個性的
ペディキュアの原色がよしポンポングリア
梅雨晴間人工衛星いくつある

向日葵 藤澤喜久

向日葵と対峙するかに車椅子
向日葵の世代交代皆のつぼ
うちは手に祖父も話に加はれり
青田中東北本線 只一途
夏蝶の紋羅マチスカホワン・ミロ

蔦青葉 上戸千津子

廃屋に郷愁そそる蔦青葉
古団扇風は昭和を連れ回し
妣の声教へこまれし半夏餅
梅雨上り「六甲ブルー」も鮮やかに
谷川の音に喜ぶ登山道

二重虹 福田千春

夕虹や保健室にはあと一人
生ビール妻より夫のあから顔
三本締め終ればビール一息に
沢行けば男滝女滝の光り合ふ
貸し傘を返し渋谷の二重虹

花時計 熊倉千重子

半夏生さみどり揺るる田に夕日
産院の入口飾る日々草
日々草時をゆるりと花時計
切子グラス交はしてつもる話など
天災の無き地に香るくちなしよ

八木節 近藤徹平

大叔父の八木節音頭田植の夜
田植機の夫婦に道を譲る朝
ほやよ海鞘はるばる来たる陸奥の浜
本堂に小僧大の字日の盛
「銀恋」の発車メロディー梅雨あがる

片かげり 大塚茂子

手庇をやつと解きて片かげり
目が合うて岩魚のごつき面構
水を切る岩魚の尾びれ煌めかし
山峡の赤平川をゆく岩魚
おきやん座す鳴海絞りの藍浴衣

幸わたる 井上玲子

吊橋へみるみる深し夏の霧
ギヤマンの花瓶に野草風まねく
ギヤマンのグラスにワイン米寿かな
朝露に光燦々日日草
椰子の木の風わたるとき幸わたる

雲の峰 荒井俱子

南風や知覧に残る兵の文
夏の霧ガス灯ともる港町
地曳網雲の峰よりたぐり寄す
雲の峰湾すべり出す帆掛け船
引く波に攫はれさうな浮輪の児

キーウイ棚

野口和子

ひさびさの子は大人びて夏祭
キーウイ蔓引けばこぼるる夏の空
涼風の通る道筋犬の道
コンピニで見せ合ふ釣果鮎はぬる
気だるさと儂なさ残し祭果つ

峰雲

川崎道子

曳売りの残す鱗朝曇
勤行へ火蛾の果たる長廊下
蟬時雨なかなか上らぬ願ひ石
地雷地の鬼瓦威力失せ
峰雲へとどく喚声ホームラン

ドライブ

西浦千枝子

ドライブの座席に大きな波団扇
隧道抜け一つ気に広がる青田かな
梅雨明けや友と落ち合ふ道の駅
ドライブバーの眼を癒す大賀蓮
ふる里の山改めて見る炎天下

心太

松山清子

しばらるるものなにもなしソーダ水
図書館に好きな作家を探す夏
駄菓子屋のわいわい賑はふ夏休
明け方の夢はせつなし髪洗ふ
ところてん介護認定受けし日の

第7回「水明塾」のご案内

[と き]

2023年10月30日（月曜日）

午前の部（水明集作家対象）10:00～12:30

午後の部（水明全誌友・同人・季音同人対象）14:00～16:00

[と ころ]

浦和駅東口パルコ10階第13集会室

詳細については、10月号にてご案内いたします。

※午後の部は堀田季何講師を招聘しての講演会、

午前の部は全句講評講座。

事業部

季音花

安 寧 青木鶴城

大虹の涙揺蕩ふにはたづみ
 二人居の風と思へば団扇かな
 夏の蝶心があれば近く飛ぶ
 短夜や読み耽る詩に痛みあり
 白南風にいまだ屍の聲乾く

伏見 檜鼻ことは

箒目の庭の一隅合歡の花
 水琴や町家の奥の夏座敷
 伏見来て造り酒屋の噴井かな
 出遇ふ人みな美しき蛍の夜
 玉ねぎを剥きて他愛なき会話

夏の瞬 日高道を

日盛やパレードを待つ人の黙
 一瞬で残像となる夏の蝶
 炎天や時空の止まる街の午後
 早星これ人生の過客かな
 白鷺や孤高の白を際立つる

蔭のやさしき 河野はるみ

日盛や微動だにせぬ遊具たち
 日盛や貨物列車の長長と
 名刺の大緑蔭に集ふかほ
 溪流釣りみやげは魚籠の花山葵
 ひとの香を恋うてうとうと夏の宵

花莫塵 笹本啓子

向日葵の迷路に消えし二人連れ
 炎昼の魚河岸人の眠りをり
 片蔭に話の続き持ち込みぬ
 水盤の余白に入るるさざれ石
 花莫塵や座長素早く三役目

ウクレレ 野田 静香

海開き解き放たれし子の手足
自転車の籠にウクレレ盛夏来る
客船の出航惜しむ遠花火
蝶の道亡き人偲ぶ夏館
炎天やパズルのごときメモのあり

瑠璃の煌めき 曲淵 徹雄

橋の灯に増さる水音夏の川
雲まとふ源流の山夏の川
雫して姿整ふ花菖蒲
白南風や句帳片手に立つ舳先
不意打ちに瑠璃の煌めき夏の蝶

牛突き 保坂 翔太

牛突きのいよよ決戦青嵐
庭園の飛び石つなぐ蟻の列
開け放つ古刹の薔梅雨晴間
城主めく天守の男夕焼雲
青葉潮駒のいなく都井岬

日本の夏 石田 慶子

「虹ですよ」声の主差す傘の先
登山靴まづは試しの沢登り
透明傘へのへのもへじ書く小暑
栓抜きと柿ピー盆に瓶ビール
ペディキュアの紅ざぶり日向水

暑気下し 原田 秀子

いつときの暑さ凌ぎに冷し飴
信濃より「玉だれ杏」夏見舞
暑気下し百味筆筒に犀の角
暑気払往時をしのぶ薬研かな
片かげりほつと一息乳母車

夏草 瀬戸 雄二郎

夏草を掻き分け掻き分け好釣場
夏草の中気が早い秋の花
夏草で切る傷甘し故郷よ
父母の墓訪へば夏草なほ盛ん
アナーキーな夏の草にもある秩序

金魚鉢 石川理恵

四匹に見えて三匹金魚鉢
峰雲やさよなら負けの我が母校
雲の峰ゴジラはイヌに呑み込まれ
逆光の富士を大きくして夕焼
放課後の延長にある夕焼かな

青柿 飛永鼓

青柿や選ばれしもの凜として
店員の華奢な指先柿青し
青柿や肩巾広き隣の子
青柿や踏むをためらふ青さかな
青柿や落つるも凜と上向きて

湧き水 横山君夫

老鶯や湧き水を汲む列にゐて
紀州に降る雨も大粒青梅も
どつと沸くビーチバレー南吹く
微動だにせぬ半眼の羽抜鶏
二階よりドビュッシーの「海」夕端居

芦野の里 渋谷きいち

芭蕉の行きし芦野の里の青田かな
夕山嵐今宵も青田そよぎけり
水面から連山消えて青田波
走馬燈走り過ぎたる老の夢
強弱を読み違へたり夏座敷

阪妻 染谷風子

休講の張り紙多し桜桃忌
夏の河天の怒れば暴れ川
阪妻をまねて瓢と古浴衣
夏の山バスにリュックが胡坐かく
英霊が「水を下さい」八月来

日日草 宮崎チアキ

小輪なれど精一杯や日日草
今日もまた暮れて門辺の日日草
ビードロのなよび姿や歌舞伎町
被災地に幸先のよき夕焼かな
夕風や鳩の浮巢の見え隠れ

釣船の兄貴 松島寛久

釣船の兄貴に蝶も遊び来る
青田風時も人も青青と
作務僧に箒を置けと旅の蝶
赤く燃ゆ花の魔性や蝶迷ふ
里人と地蔵も見上げる遠花火

麦酒 鈴木玲子

マリオネットのヴィオロン奏つ梅雨晴間
賽銭の妙なる音や梅雨晴間
杯高く揚ぐるビールの泡ゆたか
心地よき喧騒に酔ふピヤホール
料亭の野点の傘に夏の膳

夏空 下川光子

海の日や青い地球は海の青
吊ひの後の夏空眩しくて
洗ふたび肌に木綿のなじむ夏
夏の霧昭和の城を浮かせたり
天道虫めだちたがりの君が好き

夏祭 田中章嘉

先導は子等の囃子の笛太鼓
仲仙道繰り出す町の荒御輿
宵宮や神輿を奉る能舞台
閑かさや雨の本堂沙羅の花
海酸漿鳴らして母の仕立物

夏帽子 中野疆

ジャカラング見つめ南国近づきぬ
せいろそば涼しき湖をくぐらせて
派手にせよ老若はなし夏帽子
湖涼風海賊船の入港す
夏豪雨泥大海の中の屋根

茄子漬 後藤綾子

茄子漬や父に似て来る子の仕種
かきわけて江戸風鈴売りの両天秤
新樹光馬場に勇姿の女子学生
向日葵の疲れを知らぬ咲きつぶり
春はるくや親子が励む田草とり

『水明誌』を繙く（水明七月号）

水野星間（「岳」同人）

母の日はいつか妻の日二人旅 日高道を

母の日を家族の皆で祝うのは、子供が小さい時分であることが通例のようである。とにかく、母親というものは多忙な存在である。一方で、母の日に關しては、子としての楽しみも、母としての喜びも、こうした時期にしっかりと形成されて行く。子供が成長して独り立ちし、家庭を持つようになれば、母の日そのものは忘れずとも、もはや子供の側の浮き立つような感情も、親としての満足感を背景とした感慨の重さというものも、ともに薄らいで来る。

掲句は、老年期に差し掛かった夫婦の、偽りの無い感情を素直に叙した秀句である。連れ添った妻に対する感謝の念と、母としての役割を卒業した妻の、安堵感に満ちた精神的な安寧を願う夫としての心情を、中七・下五に余すことなく伝えてある。そして、夫婦二人きりのささやかな旅の楽しみを以て、妻への謝意を丁寧に述べている。

もし、どちらかが先に彼の世に旅立ってしまったら、こうした二人旅も叶わなくなる。人生の荒波が小休止している今このひと時を、是非とも大切にしたいものだ。

桃の花あと一息で寝返る子 松村登美枝

小生は、コロナ禍の關係で、豪州の永住権を持ってシドニーで看護師をしている長女の息子を預かることになり、生後6ヵ月から養育を引き受けて、満四年となる。自分の娘達を育てた頃は夢中であつたせいも、よく覚えていないが、孫ともなると、多少のゆとりがあるせいも、じっくり観察しながらの子育てを楽しんでいる。

掲句のような景は、実にリアルに覚えている。彼は結構筋力があるものの、中々うまく寝返りが出来なかつた。ヨイショと声を掛けて、ようやく寝返りが出来た時は、老婆共々思わず万歳を叫んだものである。そして、季語「桃の花」が、この景を引き立てている。まさに「ピッタリの季語の斡旋と云えよう。

孫モノ俳句は、避けることが賢明であると云われるが、決してそのようなことは無い。堂々と可愛い孫を詠えばよい。但し、しっかりと写生をして、感情を抑制することが肝要である。掲句は、その好例として推薦致したき秀句である。

現代俳句鑑賞

網野月を

三月の地より海より来るな来るな

高野公一

〔俳句〕7月号・来るなより

「地より海より」何に「来るな」と命令しているのか？

これは作者にしか見えない世界である。だが確実に身に迫ってくる何かがある事だけは確かなのである。掲載されている全八句には覚悟とも願いとも受け取れる句が続く。そして諧謔の効いた、作者のユーモアを解き放ったような「腹の虫」の句がメている。他に「あばら骨ごつごつ涅槃したまいぬ」「何処へ行く途中海辺に石踏咲いて」「腹の虫この身焼かれるとき鳴かん」がある。

葉桜や町を見下ろすベンチ朽ち

日原 傳

〔俳句〕7月号・春服より

毎年のようにその「ベンチ」から町を見下ろしていらしたのであろう。歳月が経つと自らと時を同じくして「ベンチ」も古りているのである。作者ご自身の齢を「ベンチ」に擬えていらつしやるのかも知れない。他に「春服は楽し孔子もう

べなひぬ」「曲水の罰杯なみなみとあれよ」がある。

閉じてまた開けるフォルダー夜の青葉

田中朋子

〔俳句〕7月号・フォルダーより

何の「フォルダー」なのか読者には分からない。それでも作者にはひどく気になっている「フォルダー」なのである。要は「フォルダー」の中味ではなくて、気になって眠れない夜を過ごしているということなのである。ふと気が付けば、窓越しに「青葉」が見える。作者は昼間には感じたことの無い、「夜の青葉」の生命力を感じている。他に「立葵ほろほろ言葉こぼれ落つ」がある。

水草生ふ奥歯が緩みだす気配

佐怒賀正美

〔俳句四季〕7月号・巻頭句より

寝中の歯軋りは歯を痛めると筆者は主治医から忠告を受けた。普通、春先の季感は旺盛な生命力を感じさせるものだが、一転、齢を重ねると「緩みだす」ことを感じることもあるようだ。

へうたんやあちこち凹みながら枯れ 西村 麒麟

〔俳句四季〕7月号・今月の華から

作者の「へうたん」句には以前から感銘を受けていた。付されたエッセイを読んで至極納得している。作者ご自身は仙境の意味を想定していらしたようであるが、筆者は禅の世界を思い描いていた。

視るたびにその名呟く我亦紅 梶谷 予人

〔俳句四季〕7月号・爽蒼佐田岬より

「我亦紅」には不思議な力があるようだ。作者が花の名を呟いていると解釈した。歳時記などには「我亦紅」の表記は稀であるが、納得して読めた。他に「佐田岬メロディライインの南風やさし」がある。

鮎の腸父の小言のごとくかな 上野 一孝

〔俳句界〕7月号・新作巻頭より

読み手に拠って「鮎の腸」のイメージは異なるであろうし、また「父の小言」の含意も異なるであろう。その分、読者に任されている部分の多い句であろうと考える。筆者は「鮎の腸」の奥深い味わいと、「父の小言」の懐かしく、有難いこととであったという思いを新たにしている。

手火花を継いで大人ぶつてをり 吉田 祥子

〔俳句界〕7月号・火を継ぐより

他の「手火花」から自分の「手火花」に火を貰って、得意になっっている子供の景を想像できる。が、筆者は「大人ぶつてをり」をあからさまに嬉しさを表情に出さない大人の嗜み

のようなものとして解釈してみた。他に「夏夕べ象の日陰に佇めり」がある。

碑の裏は葉莢の香の桜まじ 瀬間 陽子

〔俳誌「陸」〕7月号・作品Iより

座五の季語「桜まじ」が「葉莢の香」を運んで来るのである。「碑」とは忠魂碑、もしくは英霊碑であろうか。筆者は反戦の意を読み取った。

人は過ぐイロハカヘデの花紅き 我妻 民雄

〔俳誌「小熊座」〕7月号・極星集より

見過ごしてしまいがちな「イロハカヘデの花」なのである。暗赤色のそれは、「イロハカヘデ」が特殊な存在でないだけに自己主張をしない存在感がある。ただ、作者だけは目を凝らしている様だ。

ノッカーの乾きし音や青胡桃 太田 土男

〔俳誌「草笛」〕5月号・ノッカーより

この家に住まう人たちの何と若々しいことか。「ノッカー」は硬質な音色を響かせているが、実は住まう家族はこれからの人々なのである。「青胡桃」がその様態を担保している。

白墨で書くむげんだい夏至近し 藤田 直子

〔俳誌「秋麗」〕7月号・ミシガン大学より

「むげんだい」とは8の字を横にしたような記号であろうと思う。「夏至近し」という頂点へ至る前の文字通りの無限と、そして勢いは夏至を経た今でなければ分らないものである。

全国大会の記



保坂翔太

第一部 全国大会

水明俳句会全国大会は、梅雨の季節にもかかわらず、好天に恵まれた令和五年六月二十五日（日）、さいたま共済会館において行われました。八十二名が集い、十二時十五分に開会されました。

司 会 日高道を総務部長

開会の言葉 網野月を幹事長

これより令和五年水明全国大会を開会いたします。このように一同が集まることはたいへん貴重なことです。普段、水明誌での交流はなされておりますが、この場に集い、皆が言葉を交わすことにより、充実した一日となり、じっくりと俳句を味わう機会となります。この大切な時間をともに過ごしていきたいと思えます。

物故者への黙祷

季音同人の宮崎紫水氏が、本年三月三十一日に逝去（享年六十五歳）されたので黙祷を捧げました。

山本鬼之介主宰挨拶

皆さん、今日も見事に晴れました。水明晴れ、かな女晴れです。本日は大勢お集まりくださり有難うございます。地元

を中心に東京や横浜方面から、そして、遠方の若狭から鳥羽和風・島津初花・松宮保人・飛永鼓さんが、神戸から森本早苗さんがお出掛けくださり、大変嬉しく思っております。

新型コロナウイルス感染症はまだ継続していますが、丸三年を過ぎて新たな段階を迎え、水明俳句会の諸行事も年頭から新春俳句大会・水明忌・春の吟行会・若狭句碑巡りバスツアー、そして全国大会と、計画通り進めることが出来て大変喜ばしいことです。

水明の会計は、皆様からお寄せいただく発展基金を補填することにより、月々黒字で乗り切れています。水明俳句会のホームページは、俳句結社の中では一番だと自負しており、現代俳句協会からも注目されています。水明インターネット句会も現在五十名近い方々が参加しています。水明俳句会以外の外部の方々が多くを占めており、水明俳句会の会員の方々がもつと多く参加されることを希望します。

毎年五月に、さいたま市公園緑地協会主催の「別所沼公園初めての俳句教室」が開催されていますが、今年で十回目を迎えました。その教室の中から毎年、希望者が水明俳句会に入会しております。その第一期生の渋谷さいちさんが今年めでたく水明賞に輝きました。年内に一期生から十期生の方々の集いを実行したいと思っています。

これからの全国大会、引き続き開催される懇親会を有意義

にお過ごしください。

令和四年水明会計報告

日高道を総務部長

水明俳句会の令和四年度本会計と水明発展基金の決算について日高道を総務部長より報告があり、これを承認しました。

句集紹介・花束贈呈

星野和葉氏（句集「永字八法」）、石井喜恵氏（句集「風を踏む」）が初句集を上梓されたことを祝し花束を贈呈しました。

六賞受賞表彰

（水明賞） 横山君夫 染谷風子 渋谷さいち

（季音賞） 近藤徹平 大塚茂子

（かな女賞） 島津初花

（鼓笛賞） 北山建治郎

（山紫賞） 大塚茂子

山本鬼之介主宰から賞状を授与された七名は、感謝と喜びに満ちた挨拶の後、それぞれの句会から贈られた花束を胸に主宰を中央に写真撮影に臨みました。

新季音同人・新同人に委嘱状を授与

新季音同人「花欄」

「花欄」横山君夫

染谷風子

渋谷きいち

鈴木玲子

高橋満耶子

野村美子

(以上六名)

新同人

飯塚智恵子

石浜悦子

遠藤人美

川島夕峰

後記朝香

小山敦子

嶋田洋子

清水桂子

霜多光代

篠原さよ子

鳴海順子

藤川比早子

持永喜夫

吉川拓真

綿引まりこ

(以上十五名)

昇欄者紹介

続いて、季音「雪」と「月」への昇欄者が演壇にて紹介されました。

新季音「雪」欄 鳥羽和風

森本早苗

新季音「月」欄 熊倉千重子

祝電・ご芳志の披露等

和歌山県水明俳句会の大橋迪代氏、若狭水明会の檜鼻ことは氏からの祝電と大阪滞つくし句会の由良ゆら女氏からの手紙が石井喜恵氏によって読み上げられました。また、ご芳志をいただいた各地句会名が同氏によって披露されました。

兼題主宰選句および表彰

披講 保坂翔太・曲淵徹雄

応募があつた兼題句は、一千六百二句でした。三極の三句をはじめ、主宰選の入選句が紹介され、表彰されました。

「天」春愁や金槐集に恋の歌

大村節代

「地」伽羅の香を形見と思ふ更衣

大場順子

「人」ゆるやかに山翳りゆく竹の秋

石井喜恵

特選は四十句、秀逸は七十九句で、高位得点者の一位は境延昭氏、二位は五明昇氏、三位は正木萬蝶氏でした。

なお、兼題句の投句者は百三十五名、八組(十六句)以上の投句者三十七名が表彰されました。投句数の最高は五明昇氏の四十六組(九十二句)、二位は境延昭氏の三十七組(七十四句)、三位は加藤でん治氏の三十組(六十句)でした。

— 休憩 —

山本主宰の講評

「この場に出席された方々の句は、すべて講評したい」との前置きがあり、まず、天地人の三極の句より講評がありました。「天」の大村節代氏の句は、「金の字の詠込みに金槐集をもつてきたのが良かった。さりげなく金の字をうまく詠込んでいる。金槐集は悲劇の將軍といわれる源実朝の歌集であるが、恋の歌も詠んでいる。下五の恋の歌がよい。」と評さ

れました。「地」の大場順子氏の句は、「季語の更衣に對し、伽羅の香の形見を思ふ」との表現が素晴らしい」と評されました。「人」の石井喜恵氏の句は、「竹の秋の季語が自然に胸に入ってきた。夕刻を迎える山の時間をうまく表現している」と評されました。そして、特選の四十句、秀逸の七十九句のすべてを丁寧、約一時間に亘って講評していただきました。

閉会の言葉 大村節代編集長

本日は、梅雨の晴間となり、天気にも恵まれ、よい大会でした。長時間にわたった大会は、これにて閉会といたします。遠方からおこしくくださった方々もおられます。気を付けてお帰り下さい。

三本締めで全国大会を閉会

恒例により、水明の半被を纏った山本鬼之介主宰、網野月を幹事長、大村節代編集長が「令和五年水明全国大会」の看板を背に、主宰の拍子木に合せ、三本締めで大会を締め括り、午後四時三十分閉会しました。

第二部 懇親会

全国大会第二部の懇親会は、全国大会と同様、さいたま共済会館において、午後五時三十分より、四十八名が参加して開催されました。

全国大会に引き続き司会の日高道を総務部長から、「これより懇親会を開会いたします」との言葉の後、山本鬼之介主

宰から全国大会が皆さんの協力により無事終了したことへのねぎらいを述べられた後、「懇親会を大いに楽しみましょう」との挨拶がなされました。続いて、新事務局長の保坂翔太の乾杯により歓談のときへと移りました。

懇親会場は一つのテーブルに七人が着席できるようにセツトされ、A B C D E F Gの七つのテーブルが用意されました。歓談の時が進むにつれ、お互いに他のテーブルへと回り合い、お酒を酌み交わしながらの懇親となり、楽しい交流のときがもたれました。

宴たけなわの頃、水明俳句会において新たに結成された「クリアウオータリーバイバルバンド」の登場となりました。ギター（兼ボーカル）は青木鶴城、トランペットは網野月を、ドラムは日高道を、キーボードは小林京子の各氏によるアトラクションタイムです。同バンド演奏、そして「上を向いて歩こう」、「いつでも夢を」等の懐かしき名曲を合唱。ボーカリストとして川島夕峰氏、綿引まりこ氏が名乗りを上げステージに立ちました。

会場は大いに盛り上がり、いの一に山本主宰のペアがステージでダンスを披露したのをきっかけにダンスのペアが六組、七組とでき、歓呼の渦となりました。懇親会の予定時間はあつという間に過ぎ、閉会時間が迫った頃、学生時代は応援団であったという北山建治郎氏による飛び入りの「フレイフレー水明」を全員が腕を組み合せて声を合わせました。そして、恒例の三本締めにより午後八時にお開きとなりました。

水明全国大会 会場風景



水明全国大会 入選句

兼題

「更衣」

「竹の秋」

「金」
(詠み込み)



山本鬼之介選

【天】

春愁や金槐集に恋の歌

大村節代

【地】

伽羅の香を形見と思ふ更衣

大場順子

【人】

ゆるやかに山翳りゆく竹の秋

石井喜恵

【特選】

竹の秋吊草ゆるるる村のバス
天を突く鳥の雄叫び竹の秋
竹の秋沼に落暉の溢れけり
竹の秋火の見櫓の残る辻
竹とんぼ一直線に竹の秋
寄り添うて千金の宵おぼろなる

境 延昭
由良ゆら女
井上燈女
境 延昭
近藤徹平
矢作水尾

山幾重阿波一国の竹の秋
竹の秋屋号呼び合ふ峡の村
校章の金鵝を誇り卒業す
竹の秋大和国原雲ながる
朝戸風心さらめく竹の秋
竹の秋四阿に聞くばつたんこ
千木高し金の彩曳く春の宮
尼寺に潮の香ほのか竹の秋
山車に貼る金一封の重みかな
更衣BGMはハワイアン
月朧寄り添ふ衣の鬱金色
大空に起筆の一字竹の秋
二代目の猫の駅長ころもがへ
墳丘へ風吹き上ぐる竹の秋
襖絵の草木ゆらく竹の秋
大太鼓の一打拡ぐる竹の秋
更衣ネイルアートの華を添へ
金色の折り紙の鶴涅槃西風
祇王寺にうすき陽の入る竹の秋
をんどりは裏声しぼり竹の秋
更衣納戸の中の納戸色
金襴の帯揃ひ舞ふ春の宵
竹の秋かくれんぼして忘れられ
天金の飛花いづくより古書の市

五明 昇
田寺玲子
青木鶴城
森本早苗
大塚茂子
丸山マスミ
鳥羽和風
小林京子
梅澤佐江
越田栄子
菅原卓郎
島津初花
正木萬蝶
石山かつ子
菅原真理
吉川拓真
永野史代
大橋廸代
元田亮一
岡田宣子
梅澤輝翠
松井由紀子

「鹽」いまだ看板となす竹の秋
春雷や先づ金鶏を起し給へ

袖小屋に煙一条竹の秋

百歳を祝ふ金杯昭和の日

更衣片膝立てて靴の紐

ほけつとに恋の予感を更衣

衣更へて鎧ぬぎたる思ひかな

涅槃会や地獄に下ろす金の糸

竹秋や封間塚に盃二つ

若嫁の野良着はきらり更衣

【秀逸】

復元の豎穴住居竹の秋

群島を洗ふ黒潮竹の秋

更衣ナースの肘のまろやかに

木屑置く仏師の膝や竹の秋

竹の秋幽けき家老館かな

濃淡の山の彩竹の秋

光り合ふ竹百幹や竹の秋

札所への道細りゆく竹の秋

竹の秋十三重の石の塔

落武者の彷徨ふ影か竹の秋

暮れ方の水田明りや竹の秋

星野和葉
加藤でん治

日高道を

染谷風子

網野月を

渋谷きいち

横山君夫

松村登美江

山中みどり

松宮保人

境 延昭

井上燈女

町野広子

佐々木史女

矢作水尾

森川義子

五明 昇

〃

〃

蕎麦を待つ二合の酒や竹の秋
名城の金の鯨鳥帰る

初蝶や「萬金丹」の小看板

恋猫に金の三日月銀の星

引越して燃やす恋文竹の秋

戒名に曆一文字竹の秋

湯には湯の音や遅日の金盞

柚道に瀬音響かふ竹の秋

春の夢金覆輪の鞍に乗り

竹の秋津軽の宿の文机

竹の秋巴の墓は石一つ

身ごもりし子は双子とか竹の秋

竹の秋雀寄り来る尼僧庵

金管はサンバのリズム風光る

夜桜や怜人待つ金屏風

分譲地彩る景色竹の秋

篁は風音ばかり竹の秋

家ごとに墓のある村竹の秋

青春の扉を開く更衣

更衣羽化も脱皮も無かりけり

花ミモザ金婚過ぎてなほ悱気

袋戸棚に金鶏勲章昭和の日

どこまでも続く寺領や竹の秋

竹の秋風の研ぎゆく權の音

五明 昇

〃

本橋稀香

新 曆文

〃

菊池ひろこ

丸山マシミ

曲淵徹雄

檜鼻ことは

大場順子

福田千春

熊倉千重子

田寺玲子

十倉和子

河野はるみ

梅澤佐江

〃

保坂翔太

境 延昭

〃

川崎道子

原田秀子

石井喜恵

作務僧のふかき溜息竹の秋
 吾輩は猫の駅長更衣
 問ひかくるあなたの遺影竹の秋
 万葉の風浴び散歩竹の秋
 金丹をさがしに春の大江山
 春灯や木型から生る金花糖
 笙・太鼓耳に残りて竹の秋
 武蔵野や河に沿ひたる竹の秋
 竹秋や千家に裏や表あり
 竹の秋琥珀の虫は羽ひろげ
 更衣脱げども脱げどもマトリョーシカ
 奥津城へ長き石段竹の秋
 木洩れ日は風の意のまま竹の秋
 別れ道右は里へと竹の秋
 濡縁のかすかな湿り竹の秋
 故郷の父母の旧居や竹の秋
 甥つ子は竹研究者竹の秋
 剥落の元禄絵馬や竹の秋
 春風や水面に歪む金閣寺
 半襟に金糸の刺繍花の冷
 金継ぎや心の傷に春さざす
 颯爽とサブリナパンツ更衣
 ひるがへるシーツの向かう竹の秋
 愛猫の目に金色の春の月

荒井俱子
 石田慶子
 鈴木康世
 大村節代
 山田美佐尾
 池田珪子
 正木萬蝶
 石山かつ子
 笹本啓子
 池田雅夫
 高島寛治
 永野史代
 大橋勉代
 反町 修
 小林京子
 野田静香
 北山建治郎
 西幅公子

佳作

初めての金婦月来春の風
 夫在らばどう？と問ひたし衣更ふ
 何処からか篠笛きこゆ竹の秋
 傷心の日の蘇る更衣
 広大な藪に高塀竹の秋
 当てもなく起伏の道を竹の秋
 日輪の角度確め更衣
 更衣タンスの中の母に逢ふ
 あなどれぬ百低山や竹の秋
 なまめける秘仏のポーズ竹の秋
 菩提寺の本堂裏は竹の秋
 衣更へて行司装束若葉色
 野仏の木洩れ日しづか竹の秋
 行き暮れて祇王寺訪ふや竹の秋
 憂鬱をかなくり捨てて更衣
 北向きの部屋の小暗し竹の秋
 花菜土手裏も表も金色に
 接写する桜と空の黄金比
 竹秋や古道明るき仏達
 梵鐘の近く遠くに竹の秋

梅澤輝翠
 松井由紀子
 星野和葉
 日高道を
 宮崎チアキ
 小倉倭子
 網野月を
 渋谷さいち
 柚木治子
 森下美智枝
 下川光子
 霜多光代
 井上玲子
 丸屋詠子
 石川理恵
 椎野美代子
 茂木和子
 松宮保人
 松本光子
 葛城千世子

縁先の人それぞれの竹の秋
 風匂ふ通学のバス更衣
 竹の秋草木に埋もれ峡の途
 春愁や金のまなこの仁王像
 卒寿にも夢をはぐくむ更衣
 菖蒲湯や今は昔の金盥
 金物屋ひつくり返す雷雨かな
 埋蔵金あるかも知れぬ山笑ふ
 ネクタイを今日から取るも更衣
 金箔の酒に漂ふ春愁
 団長はポニーテールよ竹の秋
 行く春や祝ひ袱紗の金刺繍
 札所へと続く道なり竹の秋
 朝礼の白きが眩し更衣
 重さうな金貨のやうな春の月
 修善寺の瀬音葉音や竹の秋
 金の鯨構へる天守春の月
 金縁のカップにカフェラテ春の昼
 金継ぎに偲ぶ茶碗や春惜しむ
 古民家を囲む一群竹の秋
 里山に朝もやの立つ竹の秋
 胸騒ぎするほど戦ぐ竹の秋
 花筏大口開くる金の鯉
 うららけし金の草鞋の古女房

阿部幸代
 〃
 井関礼子
 井上燈女
 井上玲子
 永野史代
 〃
 越田栄子
 〃
 〃
 〃
 遠藤人美
 横山君夫
 〃
 〃
 横山礼子
 岡田宣子
 〃
 下川光子
 加藤でん治
 〃
 〃
 河野はるみ
 〃

金髪で七十路の春かつぽかつぽ
 金継ぎの夫婦茶碗や春の虹
 飯櫃の籠は金色嫁菜飯
 忘れものして来し心地更衣
 思ひ出が化粧鏡に衣更
 軽やかに青春包み更衣
 金閣の薨の波や風光る
 「翁」舞ふ金春の能春の宵
 金覆輪の鞍置く白馬風光る
 襟足の美しき女将や更衣
 鏡の前行きつ戻りつ更衣
 更衣して雨の中行く神楽坂
 竹の秋道路鏡にも死角あり
 掌の皺の月日や竹の秋
 更衣仕舞ひ残しの出番あり
 高塀の中は覗けず竹の秋
 街に残る旧家の屋敷竹の秋
 竹の秋寺領を囲ふ石の塀
 背表紙の金文字くすみ春の蠅
 遊具みなペンキ塗り立て竹の秋
 首のなきマネキンならび更衣
 書生なる古き呼び名よ更衣
 江の電に手を振る浜辺竹の秋
 更衣胸元にある仕付糸

河野はるみ
 皆川更穂
 栢尾さく子
 〃
 関根千恵
 関谷多美子
 丸屋詠子
 丸山マシミ
 〃
 〃
 〃
 〃
 菊池ひろこ
 吉川拓真
 宮崎チアキ
 〃
 〃
 境 延昭
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃

ものの芽や時を刻まぬ金時計
 春泥を筋金入りの所轄でか
 更衣足に馴染みし杉の下駄
 船長の袖の金筋風光る
 イニシアルの赤の花文字更衣
 春の燭傘寿を祝ふ金屏風
 竹の秋パンダ祖国へ帰りけり
 高塚の主の名知れず竹の秋
 銀髪をショートカットに更衣
 竹の秋旅の一座が南から
 金鍔の太刀の一振り春の闇
 更衣嘘のつけない三面鏡
 水門の錆びしハンドル竹の秋
 古寺の奥に一叢竹の秋
 四阿に戦ぐ日の影竹の秋
 身の丈のまた縮みをり更衣
 古戦場見下ろす石碑竹の秋
 警策の音が奥より竹の秋
 金管楽器高鳴る春の決勝戦
 料亭の庭や小さき竹の秋
 廃屋の傾く鉄扉竹の秋
 社へと続く坂道竹の秋
 廃校の時計の刻み竹の秋
 クリムトの金さながらに竹の秋

境 延昭

曲淵徹雄

近藤徹平

熊倉千重子

元田亮一

原田秀子

剃髪の白き項や更衣
 外出の尼僧ベレーも更衣
 里山に拾ふ風音竹の秋
 直実の眠る西山竹の秋
 結願へ胸突き坂の竹の秋
 農小屋の軋む片戸や竹の秋
 竹の秋山を屏風に父母の墓
 竹の秋作務衣の僧の遠会釈
 切通し抜けいざ鎌倉の竹の秋
 野仏に揺るる木洩れ日竹の秋
 校塔に校旗へんぼん更衣
 更衣胸に気概のピンバッチ
 竹の秋御堂を風の吹き抜けり
 卒園やママに手づくり金メダル
 竹の秋風は序曲を奏でをり
 颯爽とバイクの僧の更衣
 更衣黄泉遠からず近からず
 空晴れて心も晴れし更衣
 菩提寺の裏山すべて竹の秋
 竹の秋古民家引戸開け放つ
 竹の秋万葉の句碑相聞歌
 更衣恋の真似事したくなり
 入学式緩き学ラン金釧
 竹の秋めつたに開けぬ裏の木戸

原田秀子

五明 昇

後記朝香

荒井俱子
高島寛治
佐々木史女

佐藤克之
榊原聰子
笹本啓子

金継ぎの皿の値踏みや春の昼
 飛び石にしぶきの軽し竹の秋
 食卓は金にかがやく初松魚
 会ふまでの日を数へては更衣
 更衣暫し一人のファッションショー
 墨堤に添ひし花街や竹の秋
 誰彼に逢ひたくなりぬ更衣
 嗟峨野路やさやや戦ぐ竹の秋
 寺の庭小石うづまき竹の秋
 更衣素顔に淡く紅をつけて
 セーラー服アイロンかけて更衣
 竹の秋プラトニックのポート揺れ
 更衣してもひとりはひとりなり
 手になじむ一本のペン竹の秋
 更衣してより遊び多くなり
 細き指金の鶴折り春の宵
 胸襟に風を通すや更衣
 ステージの歌手の気分や更衣
 衣更へて眩しき今朝の学園前
 能楽師の金襴に映ゆ花篝
 ころもがへ田舎暮らしの作務衣かな
 尺八の音色かすれて竹の秋
 花筵金の蒔絵の御重かな
 金沢の夜はのど黒春時雨

笹本啓子
 山下ユリ子
 山岸久美子
 山中いちい
 山中みどり
 山田美佐尾
 山崎郁子
 糸井しるく
 篠崎紀子
 秋谷風舎
 十倉和子
 洪谷きいち

宝探しのヒントの一つ竹の秋
 更衣クローゼットの白眩し
 頭振り妄想を消す竹の秋
 竹の秋一葉に記す文字は「忍」
 胸元のVの切り込み更衣
 金盃に紅ワイン注ぎ櫻の夜
 花冷えや駆け込み寺には金の鯉
 天空に金の鯉風光る
 足らぬ丈足らぬ巾あり更衣
 墓碑銘は音読すべし竹の秋
 レッズファン赤から赤へ更衣
 ポケットに残るレシート更衣
 友逝きて金継ぎの皿春の夕
 百翁は鎌の遣ひ手竹の秋
 藍染のこなれ嬉しき更衣
 金継ぎの皿も交じへて花宴
 少女らの羽化の始まり更衣
 衣更ふ母の仕草や京仕込み
 竹の秋御苑の細き散策路
 訪れて芽吹き初めの金閣寺
 春光や書斎に恩賜の金時計
 金婚の夫婦の山河山笑ふ
 更衣明治女の気骨かな
 花ミモザ磯風に舞ひ金色に

緒方みき子
 小駒さち子
 小倉倭子
 小島喜代子
 小林京子
 松井由紀子
 松宮保人
 松山清子
 松村登美江
 松本光子

甘辛団子旨し京都も竹の秋	松本光子	胴回りちつと凹ます更衣	菅原卓郎
金星に馴れぬ手刀五月場所	新 曆文	金ボタン掛違ひのまま卒業す	瀬戸雄二郎
ボケットに切れたチケット更衣	〃	湯屋までは飛石づたひ竹の秋	星野和葉
竿二つ所在なきかな更衣	新井のり子	大師堂に五円玉一つ竹の秋	〃
いなせなる車夫の太股竹の秋	新井孝磨	カタカナの旧姓残る更衣	〃
家中に風を通して更衣	森 和子	竹の秋橋のたもとで指切りす	〃
浅草の金のオブジェや春の川	森下美智枝	更衣高価なボタン一つ失せ	〃
朝の陽を受けて本領竹の秋	森川義子	筋金入りの男一匹春深む	〃
なまこ壁つづく蔵町竹の秋	〃	更衣真昼の巫女の賑賑し	正木萬蝶
伽藍より洩れくる経や竹の秋	〃	黄金の風呂ある湯宿春深む	〃
寺町や雨の匂へる竹の秋	〃	大金星の小兵の技や春の駒	〃
金継ぎの絵皿に透ける桜鯛	森美枝子	あのひとの好きな水色更衣	〃
竹の秋鯿背な俵夫の駆けて行く	森本早苗	更衣女将の割烹着の真白	〃
人力に乗る人美しき竹の秋	〃	金閣の金の鳳凰春の星	〃
金平糖舌に転がす日永かな	〃	アオザイもチャイナドレスも更衣	〃
風光る金欄緞子の花嫁御	〃	軽やかに靴をメッシュに更衣	〃
古都の道葉ずれの音す竹の秋	神澤せい子	うぐひす嬢の声うら返る竹の秋	〃
更衣ほんとに好きなすみれ色	菅原真理	金継ぎの家宝の酒杯春深し	〃
堀越しの静かなさやぎ竹の秋	〃	竹秋や鼻梁うるはしデスマスク	〃
サツパ舟行きかふ町や竹の秋	〃	風見鶏の眼の虚る竹の秋	〃
竹の秋庭奥にゐる稲荷様	〃	竹の秋戦後を生きし母のこと	清水桂子
春日傘光集めて金の傘	〃	金容の目鼻のつべり竹の秋	西山貴美子
宮仕へ果ては気ままな更衣	菅原卓郎	竹の秋翁の背中の気骨かな	西幅公子
初鮎のちさき生簀や金盃	〃	しなやかに大風いなす竹の秋	〃

古井戸や農家の裏の竹の秋
 裏山に揺れて八の字竹の秋
 女子高に白波の立つ更衣
 笊に夢たくす砂金や山笑ふ
 夏めきて旅の約束金曜日
 錬金術を知る由もなき巢立鳥
 コロナ禍の明けて素顔や更衣
 更衣島へ赴任の新教師
 弁天の資金洗浄四月馬鹿
 足元のふくらむ気配竹の秋
 深追ひの恋はみのらず竹の秋
 退職てふ門出を祝ふ竹の秋
 鬨ぎ合ふ金波銀波や桜鯛
 竹の秋光を零す砂時計
 昼灯る鎮守細道竹の秋
 能面に謎めく笑みや竹の秋
 衣更ふ少女上手に風を着て
 鳴き竜の金の目ん玉春の雷
 夏近し末尾を進むホルンの金
 煮こぼれし栄螺の殻の黄金比
 竹の秋葎戸開き能舞台
 どの川も海へ急ぎぬ竹の秋
 アンテナに留め金ほどの四十雀
 更衣気憶たどればそこに母

西幅公子

青木鶴城

石井喜恵

石山かつ子

竹の秋遠廻りして女坂
 金比羅宮の参道なかば飛花落花
 表札の替はる旧家や竹の秋
 招待状に金の縁どり春灯
 更衣「いつこく堂」の蝶ネクタイ
 金額の無い領収書春の闇
 松の芯筋金入りの宮大工
 憧れの金縁眼鏡や入社式
 黄泉がへる金鵝勲章春の泥
 音合はぬ金管楽器夏近し
 京菓子に添ふる黒文字更衣
 堀割の水清らなる竹の秋
 露坐仏にのこる金箔竹の秋
 コップ酒の双肩さびし更衣
 女車夫にまかす行く先竹の秋
 竹の秋川はとろりと蛇行せり
 少女らの生足まぶし更衣
 上げし髪翡翠で止めて更衣
 この服を着て逢ひし事更衣
 一の宮の刻む歳月竹の秋
 かぎろひて炎上の如金閣寺
 竹の秋野外ライブに迷ひ込む
 前後ろ分らぬ服よ更衣
 制服の白のまぶしき更衣

石山かつ子

石川理恵

石田慶子

川崎道子

川島夕峰

染谷風子

霜多光代

大橋廸代

大場順子

大場順子

大村節代

高原和子

たんすから想ひ出放ち更衣
 校長も帰れば野良着竹の秋
 姉に添ふ歩幅は小さし竹の秋
 相槌は大事な介護竹の秋
 更衣質屋の暖簾空五倍色
 榛名湖や夢二と彦乃竹の秋
 海女となる金の卵や春の海
 竹の秋秩父はどこも佛の目
 抱卵の命育む竹の秋
 目もあやに白き二の腕更衣
 古井戸の跡の窪みや竹の秋
 残照の庭の片隅竹の秋
 閉山の金山銀山霾ぐもり
 春の海「金色夜叉」の松太し
 更衣羽織つてみたる妣の物
 新線は地下を行くらし竹の秋
 竹の秋空を突いたる御神木
 人生の節目幾度竹の秋
 竹の秋作務衣着こなす庵主さま
 鳩胸の甘き息づき更衣
 更衣潮の香つよき窓開く
 竹秋や百幹の翳風絶えず
 帆船の金髪わたる桜まじ
 衣更へて茶房の隅におさまりぬ

杉浦理恵
大塚茂子

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

池田雅夫

町野広子

鳥羽和風

椎野美代子

田寺玲子

分け入れば昼なを暗き竹の秋
 寂しさがふと込み上げて更衣
 お遍路の杖に鳴る音金の鈴
 僧の袈裟うす紫に衣更
 浦辺へと隧道開通竹の秋
 竹の秋友の遺した俳句帳
 紅を入れ口ずさむ歌更衣
 袖丈を詰めて卒寿の更衣
 ジーンズに竹の秋風馴染むかな
 初蝶や金のピアスの女の子
 のどけしや角円くなる金平糖
 竹の秋三代並ぶ写真かな
 老優の声らうらうと竹の秋
 更衣終の住処の広くなり
 家長には家長の威厳更衣
 衣食住足りて余生の更衣
 更衣裾を気にする若女将
 廃村に猫の親子や竹の秋
 廃村となりしふる里竹の秋
 竹の秋ややに乳やる母のごと
 竹の秋木戸出る尼の薄化粧
 更衣袖通さずに又茶箱
 更衣足裏に馴染む日田の下駄
 姿見を先づ拭き清め更衣

田中章嘉

鳥津初花

湯浅和

湯浅節子

藤澤喜久

内田恵子

南條さわゑ

日吉亜弥子

日高道を

梅澤輝翠

梅澤佐江

〃

竹の秋寂びて名も無き石仏
 ほうじ茶の香り立つなり竹の秋
 一服の茶と山のおと竹の秋
 庵へとつづく敷石竹の秋
 更衣こくりと動く喉仏
 家中に樟脳にはふ更衣
 怒り肩のマネキンずらり更衣
 更衣歪む硝子に歪む影

☆

鈴木康世
 鈴木要子
 鈴木玲子
 〃
 檜鼻ことは
 高橋満耶子
 大村節代
 〃

☆

最近の

座談会

名句集を探る

司会 筑紫磐井

黛まどか『北落師門』

大西 朋

越智友亮『ふつうの未来』

北大路翼

岩田 奎『膚』

駒木根淳子

新連載！ 諸家書架 稔矢まりえ

1冊100円・私の源流

水原秋櫻子

馬酔木・小野恵美子

巻頭三句

岩淵喜代子

好評連載
 成瀬政博

渡辺誠一郎

とりあえずの日々
 筑紫磐井

武藤紀子

俳壇顧問
 坂口昌弘

本田攝子

忘れ得ぬ俳人と秀句
 青木亮人

二上貴夫

句の手触り 俳人の響き
 大西 朋

本城佐和

俳句へのまなざし
 神作研一

今月の華
 川上良子

てのひらの江戸
 古典籍を旅する
 藤村公洋

谷村鯛夢

俳句のつまみ
 二ノ宮一雄

俳句と短歌の10作競詠
 ふけとしこ

押切寛子

一望百里

俳句四季
 Haiku Shiki

2023年10月号

9月20日発売
 定価1100円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

八月号の巻頭句

季音 雪

神の宮亭々として夏木立

波多野寿子

季音 月

相傘のしばし佇む濃紫陽花

松井由紀子

季音 花

夏めくやモデイリアーニの長き首

檜鼻ことは

水明集

藁の火を煽るはちきん初鰹

菅原卓郎

鼓笛集

下闇を抜けて開ける三方五湖

岡田宣子

山紫集

もさもさと蚕豆を嚙む待ち惚け

横山礼子

私の三句

近藤徹平

空澄むやジャンボ機を追ふ竹とんぼ

ジャンボ機は音速並みの時速千キロメートルで飛んでいる。竹とんぼは精々秒速数センチメートルで一瞬飛ぶ。物理的に竹とんぼがジャンボ機を追い越せるはずはない。しかし澄み渡る秋空を見上げると竹とんぼが上空を飛んでいる。ジャンボ機をあたかも追い越さんばかりに飛ぶように見ると、俳句のカメラを通して詠んだ句である。この句であえてジャンボ機と竹とんぼを対比させたのは、近代科学技術の粋を結集した巨大システムと子供が手作りの原始的な玩具を対比させることで、俳句の詩が生まれるからである。筆者の孫はお小遣いでリモコン作動のヘリコプターを買って遊んだ。百元ショップでは二個一組のプラスチック製竹とんぼを売る。この句で、筆者は幼いころ年上の従兄が竹藪から切り出して作ってくれた竹とんぼに、限りなく郷愁を感じているのである。

白百合や感染症科ナース室

令和三年の作。令和元年暮れから始まった新型コロナウイルス感染症の大流行は国内のみならず全世界の政治・経済活動・市民生活に甚大な影響を及ぼした。その中で黙々と感染症患者の治療業務に万全を期し療養の世話に尽くした看護師に捧げる句である。感染症急拡大の頃に友人を診察した町医者にはひたすらパソコンの画面を診るのみで一切触診をしなかつた。

つたそう。未知の感染症のウイルスに対しては触らぬ神に祟りなしたたのであろう。しかし看護師達は職掌柄患者に触れざるを得ないし、自分の身内に感染させる恐怖と闘っていたのだから窺い知れぬ心労があった筈。なお筆者は高校一年生の時蓄膿症手術を受けた。全身麻酔から覚めたら若い白衣の天使が「私が抱いてベッドへ連れて来たのよ」と言われ微妙な心境だった。退院まで江利チエミの「テネシーワルツ」のレコードを聴かせてくれた彼女の思い出が何故か蘇った。

雲海や水場を探す縦走路

登山ブームを惹き起した山岳作家深田久弥著「日本百名山」のうち標高三千メートル級の峰が聳える日本アルプス二十八座は登山口まで最短でも一日以上かかるし互いに隣接している場合が多いので折角登るなら縦走となる。縦走路は吊尾根だから雲海が湧き上がっても水場はない。登山地図に「水場往復十五分」と記される場合がある。水場迄下り五分登り返し十分のこと。湧き出す水量が少ない場合には渋滞が起こる。それでも「百名山」に魅かれて次の名山に登りたくなる。私の経験値では山小屋の宿泊客の半分以上は中高年の女性。山小屋で「夫が登山口まで車で送ってきて温泉に泊り、下山口へ車で迎えに来る」「百名山のうち九十七座まで登った」と聞いたので、「私は八十四座」と答えて深々と最敬礼をした。

私の三句

大塚 茂子

万緑や埴輪目を開け口を開け
さるすべり武人埴輪のまろき肩

熊谷句会を立ち上げて五周年、それを記念して平成三十年四月、当時の星野光二主宰他十七名の参加で「熊谷草」が発表されました。句会を立ち上げた福田藤十郎氏、その右腕となった加藤草太郎氏、編集の近藤徹平氏三人の努力と会員の協力の結集でした。熊谷句会はとても活発で「妻沼の聖天山・行田忍城と足袋蔵・深谷の渋沢栄一郎・東京国立博物館」等、毎年吟行に行きました。博物館には、明治の初期に、熊谷市内の中条古墳群から出土した「短甲武人埴輪」が展示されていました。輪郭の整った美しいお顔に、杏仁形の大きな眼、筋の通った鼻など端正で気品があり、正に熊谷の美人さんです。国の重要文化財に指定されており、平成館に展示されています。

最初の句は、平成二九年六月の上野博物館での一句です。万緑の平成館に武人埴輪を見付けた時の感動、私達に何かを

伝え、語りかけて居る姿に足が止まりました。

二句目は、埼玉県俳句連盟熊谷市俳句連盟（熊谷文化センター）の当日俳句です。埴輪の美しく肌滑らかさを表現したくて詠みました。見た通りの拙い俳句ですが、私にとっての大切な俳句になりました。

裏山の父の匿路や麦とろろ

父は植木職人でした。秩父郡ではただ一人伝統的建造物や大切な家を、曳いて動かせる人でした。毎朝雨でなければ、朝食の前に一仕事して、夏はうなぎや川魚、秋は自然薯やきのこ採り、畑から季節の野菜を取って帰って来ました。知り尽くした裏山で自然薯を掘る事など正に朝飯前でした。

朝食後一服して、自転車に道具を積んでどこまでも仕事に出掛けて行った、後姿が今でも目に浮かびます。

秩父盆地で、兄弟六人大家族で育ちました。これからもこの原風景を基に、俳句を楽しみたいと思っております。



短甲武人埴輪

俳誌望見 染谷風子

「かびれ」

令和五年六月号 通巻一一〇〇号
主宰 大竹多可志 発行所 茨城県日立市

昭和六年、大竹孤悠氏が日立市で創刊。「社会人として、己の責務生活に真摯に生きその生き様の中から湧き上った詩的情感を俳句に詠む」という「生活即俳道」を理念とする。

六月号は、「かびれ創刊千号記念特集号」で、巻頭言に主宰の「かびれ創刊1100号」と題しての『かびれ』誕生の逸話と、昭和二十年七月の鉱工業都市日立への艦砲射撃と空襲、そうした戦火を踏み越えての「新生日本」と共に再出発した『新生かびれ』の歴史が力強く語られている。

記念号として、主宰詠百句、「私の新作十二句」と題しての五十八名による競詠六九六句、俳論・エッセイの八作品、連句（半歌仙）九巻の特集が組まれている。

主宰詠百句より七句。

梅雨晴間先師の意志を継ぎにけり
少年に男の句ひ栗の花
変節を悔やむことあり額の花
世の中の見ゆる高さに立葵
蟹の目に孤独の見ゆる渚かな
俳人の流転を思ふ根無草

真昼間を憎し憎しと田草取

一句目、九十余年の歴史を持つ「かびれ」を継承する強い意志と覚悟が伺える。二句目、栗の花のあの独特の匂いは確かに思春期の少年の匂いだ。三句目、主宰の七十五年の人生には、種種の紆余曲折があったものと推測する。四句目、並の草々と違い、立葵のあの高さは、人間以上に世間がよく見えるものかも知れない。五句目、「われ泣きぬれて蟹とたはむる」啄木を彷彿させる。六句目、創刊者である祖父又は先師小松崎爽青氏への思いか、将又、旅の人芭蕉への思いか。七句目、田草取は、炎天下の田に四つん這いになっての苛酷な労働だ。「憎し憎し」は何に対しての憎しみか。農政か自分の運命か、貧しい農民の怨嗟が聞こえる。

「私の新作十二句」より共感句五句。

百段の上は結界冬うらら 伊藤柳香
あの頃は母も元氣や水喧嘩 大山とし子
秋の果 神話の里の神遊び 斉藤 政
聞き慣れぬ夫の病名しづり雪 早田維紀子
何もかも許してをりぬ夜の炬燵 富成千花
五十八名の競詠は作者の生活の中から生まれた句が多いように思える。これが「生活即俳道」の実践と思われる。
『俳句』令和五年三月号掲載の前主宰小松崎爽青氏に関する角谷昌子氏の論文が転載され、又戦後再出発の創刊号の復刻も掲載されている。「かびれ」の歴史を知るに良い資料だ。

山本鬼之介 選

水明集

只見線全線通り夏帽子
渾身の反りの筍鍬洗ふ
父の忌や筍飯と「おいお茶」
夏めくや世阿弥好みの四方皿
琵琶胸に飛天の笑みや梅雨の闇

おてんばもやんちやも昼寝保育園
昼寝覚思考回路の整ひぬ
名水を育む山の緑濃し
いつもの庭に母の待つごとと錢葵
白靴や躓き癖の直らずに

さいたま 池田珪子

熊谷 越田栄子

明滅は恋の峠よ螢狩
螢狩そつと肩借り目を凝らす
決められぬ旅の衣や梅雨始め

梅雨の月昭和歌謡を久に聴く
古書店の主居眠り夏至の雨

ビー玉に小宇宙ありラムネ瓶
花栗や少年一人坊泊り

万緑を駆けて駆けてや日本海
古伊万里の絵柄の透くる鱧造り
縁涼み古怪な話飛び交うて

水音のかすかな誘ひ螢狩
暗がりの帰路のまたたき螢狩
白靴を野路に踏み入れ明日香村

母逝きて庭に根を張る白菖蒲
天蓼の花なごりをし陣馬山

青芝やかつて寝転び夢語る
青芝や胸の高まる大試合

抱へたる鉄砲百合に咽せかへる
梅雨寒や朝茶の衣服ほつこりと
軽鳧の子の一羽ときをり列乱す

さいたま 清水桂子

梅澤輝翠

越谷 阿部幸代

さいたま 岡田宣子

大奥の興宴なりや花菖蒲

萍の僅かな隙に射す光

時の日の風の海さす日時計よ

でで虫の渡り切るまで君を待つ

後退はさらさらあらず蝸牛

野の花と水明抄を父の日に

縁側に点描続く蟻の列

君去りし海を見てゐる夏帽子

山里の空はむらさき桐の花

鈍行の夜汽車の窓に夏の星

青芝や倒れ込むまで走る五歳児

先の世はおしやべり人か火取虫

父の日の何事もなく過ぎゆけり

父の日や父の形見は破れ辞書

夏蝶の妖しきまでに羽根透けり

蒼天へ飛び立つごとく岩千鳥

石鱗の香よ青芝の膝朮

父の日や「かたたたきけん」残しをり

仲見世の路地を異国語薫る風

月と戯るる神社の庭の濃紫陽花

さいたま 菅原真理

綿引まりこ

篠崎紀子

皆川更穂

青梅を採るその手やさしき修道女

鴉の子頭をよぎるヒツチコック

吾の足に蟻登らむと思案中

楽堂に溶けこむ我や夏の夜

東京のメトロに迷ふ半夏生

飛魚とんで銅の色の海しぶく

夏帽子脱ぐや黒髪放つ熱

剣道場の静かになりぬ桐の花

佳人ゐて垣根乱れず鉄線花

翡翠や天は二物を与へ給ふ

闇知らぬ街のはざまの螢狩

サンガラスたたみスターの決め台詞

朝ドラの主題歌聞こゆ夏やかた

新妻の足を取らるる田植かな

大天狗統ぶる高雄の青嶺かな

時の日や過ぎ来し日々に重さあり

寺山を鎮むる涅槃五月雨

見沼田へ三代そろひ蛭狩

おしやれする決め手は白の夏帽子

夏雲を仰ぐ老松主顔

平塚 丸屋詠子

さいたま 小林京子

伊奈 菅原卓郎

さいたま 山岸久美子

昼寝覺夢に妻子を置き忘る

さいたま 森下山菜

葭切の湖に網打つをとめ漁夫

小走りのフレアスカート栗の花

さいたま 村杉清吉

マチス観てうすくれなゐの梅漬くる

「休診」の文字見入る人夏帽子

渾身の一手が悪手梅雨に入る

五月闇手持無沙汰の休刊日

かりそめに翡翠となり飛ぶ彼岸

遠雷や話題途切れぬ馴染み客

父の日や少し加筆の遺言書

新 曆文

客室の掛軸の書や籐寢椅子

本橋稀香

青芝に座して語らむ人生論

夜は密に密かに散りぬ栗の花

紫陽花の嘘を見透かす社かな

呼び鈴に応へなき家鉄線花

世が世ならジャンヌダルクや晶子の忌

マンシヨンの狭間の家の百日紅

青芝や狐ダグンスの腰の振り

戻り来し賓頭盧撫づる汗拭ひ

でで虫や時の流れは滝のごと

西幅公子

アルバムの同じポーズの考曝書

霜多光代

河鹿笛往時を遺す芋車

青芝にドローンの影ゆらめきぬ

先達の若狭に生くる初夏の句碑

父の日や遺愛のライカ箱に居り

萍を掬ひ両手に余りけり

著莪の咲く山の辺の道僧ふたり

万緑や水音高く沢登り

紫陽花の雨滴光りて藍尽くす

世を忍ぶ恋よ四葩に夜の雨

夏川へ流れ落ちをる田水かな

反町 修

板壁にびたり静止の守宮かな

風薫る盆栽園の異邦人

舟下り右岸左岸に薫る風

夏柳水面に映る築地堀

夏霧や背を光らせ一馬身

賓客をもてなす離宮夏の宵

天道虫暁光あてに飛び立てり

翡翠の青き飛び込み金メダル

さくらんぼ今年も届く妹は喜寿

加藤でん治

五月雨や童話の中の黒世界
翼竜の人形静か微雨の夜
天命の尽きし大樹や梅雨曇
姫系の白ワンピース梅雨晴間
さかんしやの玩具停まらぬ梅雨の雷

さいたま 吉川拓真

蝙蝠や寺の森から実家まで
夕さりや子守少女と蚊食鳥
冷麦や過不足もなきこの齡
スニーカー一足ごとに夏来る
蚊食鳥子守し弟傘寿なり

杉戸 佐々木史女

列島の山から抜くる夏の川
夏の川渡りやがては三瀬川
夏の川忘れし頃に鬼と化す
連獅子の回る頭や栗の花
山沿ひの白きさざ波栗の花

千坂平通

この庭は俺が主と蟾蜍
忌日くる青鬼灯よ紅くなれ
茉莉花が厨の西日緩くせり
養老の川の音密か螢狩
決着は「こめんなさい」よ夏の空

さいたま 飯田忠男

夏めくやガラスの皿にカルパッチョ
豆飯の素朴な味を好みけり
鈴蘭や少女の声のよく通り
鈴蘭や朝のドラマの話など
鈴蘭や猫は首輪の鈴鳴らし

若狭 山崎郁子

ホールインワンの先客蝸牛
葉に白き迷路ひと筋蝸牛
下駄を履き打水をして古風なり
萍の花ひしめく池塘尾瀬ヶ原
時の日の時の止まるや座禅会

竹澤和子

昼顔の奔放に這ふ向う岸
山並の輪郭確と梅雨の晴
蟻の列掟を守る心意気
境内の靴の音消す苔の花
放つ香のハーブミントの茂りかな

岡本祥子

さきたまの古墳の里やうろこ雲
結願の宿坊ひとり虫時雨
翳雲宇宙と和む露天の湯
盛塩の路地の店先残暑かな
六地藏六の面差し白桔梗

香田裕誌

青紫蘇の香や出棺へ手を貸しぬ
青林檎一つひとつに闇を抱き
水を切り掛け直したる釣忍
蜘蛛の囀の軽くしなやか風の中
団扇風同じ話にうなづいて

さいたま 古池恵里子

みなみ風迷蝶つれて海渡る
ハープ橋軒にさへづるつばめの子
烏賊並ぶ岬の路地に招き猫
守宮追ふ光る猫の目時とまる
黒南風や「クライミーアリバー」唄ふ

さいたま 藤川比早子

来てみれば風まつたりと夏至の海
過去よども緋色の帯の黴の香よ
やはらかに優先席に薄暑光
目をつむり風を探るや夏至の夕
席取りは百戦錬磨とかげの子

川口 新井のり子

秩父嶺に太古の地層滴るる
滴りや神在すてふ男山
滴りの道筋細き磨崖仏
形代の肩に息かけ一の宮
テリア抱き茅の輪の列に美少年

森 和子

紫陽花を一毬分けて挿し木時期
弄られて尺蠖つひに枝になる
紫陽花のデッサン細か小一時間
戦争の終はらぬ愁ひ額の花
夕焼や夫唱婦隨の白き杖

さいたま 山戸美子

白靴に鯖街道の黒い土
古井戸を囲むどくだみ十重二十重
バスの旅草生ひ茂る古戦場
時の日や五時に流るる海の曲
咲き満ちて神宮の森花菖蒲

森下美智枝

飛魚や零戦のごと鮮烈に
子会社へ出向呻る生ビール
青葉風木曾三川が通ひ路
若狭路へ車窓をなづる青葉風
つまづけばいたはり顔の雨蛙

吉川 杉浦千祐
(理恵改め)

梅雨冷やガレのランプのあたたけし
梅雨寒や三毛猫家で大欠伸
百合の花香りの弾を飛ばしをり
純白の香りのブーケ百合の花
梅雨晴間天使の歌声響きけり

小駒さち子

五月雨や森に命を注ぐごと
野獸派の若き自画像五月闇
咲き誇る百日紅の骸かな
母の手の老いて滑らか百日紅
静かなる歓声乗せて蚩舟

さいたま 岡田芳春

着せ替への犬とぼとぼとさみだるる
五月雨や心のひだのテナーサククス
百日紅見とれて鳴りしお腹かな
海原や波しづかなる五月闇
壺生けへ一枝欲しき額紫陽花

さいたま 鈴木香音子

麦の秋鳥羽谷一路小浜線
薫風にうまいものあり御食^{ごけ}国
朝まだき小浜せはしき夏燕
籠背負ひ若狭女夜の鯖街道
麦秋や鳥羽谷一刻暮れそびれ

北山建治郎

雨の墓所供花にまぎれし蝸牛
時の日や日常忘れコンサート
時の日や母似の姉の丸き背
欠けし鉢萍移しよみがへる
萍の殖えて憩ふや池の鯉

小川洋子

仕切板外す蕎麦舗や若葉風
居酒屋の最頂に鱧の骨せんべい
草笛や背に小さきランドセル
草笛やお古の膝にアップリケ
登山帽秘境の花の缶バッチ

森美枝子

紫陽花に滴の付きて付き足りぬ
夏帽はお洒落の道具かも知れぬ
通学の足は自転車桐の花
笹百合や人に出会はぬ山之路
病院の会計待ちや梅雨寒し

秋谷風舎

草木の伸ぶる音する穀雨かな
野仏の穏やかな笑み穀雨かな
朝まだき馬酔木の房の白々と
鼓笛隊の余韻の中や花馬酔木
スクランブルの語感うるはし春宵や

後記朝香

江ノ電の窓すれすれに花みかん
鋸山海にむかひて柚子の花
腹をみせ人誑かす守宮かな
石垣の上にざくろの花あまた
天窓にはりつく守宮孤独なり

山下ユリ子

巡り来る季節の速さ夏燕
隣家より百合の香風に運ばれて
水無月や空がごろごろ騒ぎ出す
ネモフィラの青青青に目洗はる
宇治川に源氏螢の恋しきり

和歌山 嶋田洋子

あの時もティファニーブルーの水菓子
ささらめく野火止涼し禪の寺
また一つクレーンに消ゆる夏の星
蜥蜴の子逃げる気のなく石畳
国境さへ容易く越ゆる蟻の列

さいたま 石関六弦

梅の実やまろき心地で淡々と
青梅や宿坊の脇たわわなり
屋敷門色とりどりの紫陽花よ
風薫るうまくできずに深呼吸
母にあげよか白詰草の首飾り

東京 畑宮栄子

南風や蔓の行方を導きて
青の鞠ふんはり揺らす南風
くわつこうや追ひかけ歌ふ幼き日
南風買物袋なほ重し
厚化粧汗とたたかふ気合かな

小田美智

花みかん遠くに青き海の見ゆ
花柚子の香りや我を虜にす
柿の花落ちて哀れや雨激し
早朝の散歩や栗の花匂ふ
夕餉時窓に守宮や箸落とす

さいたま 高原和子

父の日やセピア色なるパナマ帽
五月来て精気賜る誕生日
Z世代でつくく生きよ青嵐
心太四方山話尽きぬもの
百日紅幹の艶艶なまめかし

鳴海順子

百合の蕊呪文を書いてみたくなり
去りてなほ芳しき百合抱く女
永訣の人白百合に埋もれて
梅雨寒やざらりと遺骨詰めらるる
梅雨寒やブルース流れぬる喫茶

横山礼子

子を守る木のでつぺんの親鳥
木漏れ日にフリル光るや著我の花
肌守る日焼防止の羽織物
三世代気儘勝手の夏レジャー
そら豆や橋のたもとの惣菜屋

武田重子

遠浅の海独り占め南風

さいたま 鈴木敦子

潮引きて並ぶ南風の砂団子
ガリッククライスを朝に南風
夕暮れのマングローブや南風
ビル群の麓を照らす手毬花

日の浅き命溢れり初夏の森
巡る初夏風を手繰りて尾瀬に飛ぶ
初夏や緑百色野に放つ
初夏やプリズム幾多水の底
初夏や茶髪点滅交差点

草加 吉田十三子

どう描くかこの梅雨空をキャンパスに

北出久美子

想ひ出の傘そつと捨て梅雨終はる
梅雨晴や功德イミを知る句碑巡り
走り梅雨置き忘れては傘を買ひ
夏料理前にスビーチ長々と

バス停に話の緒継ぐ濃あぢさゐ
一瞬や車窓にみどり引く植田
師の背の凜凜玻璃の夏茶碗
片隅の暗号辞典落し文
ナイターや四方八方浮かれたり

大阪 遠藤人美

ほろほろと空木の花の散り初むる

小山あつ子

散る花をつなぎ止めたる蜘蛛の糸
風渡り鯉はゆるりと菖蒲池
菖蒲咲く友の歩みの早きこと
短夜や東雲ほのか茜さし

落し文寂聴尼長期不在なり
落し文拾ひし人のなきままに
拾はんか迷ひ拾はず落し文
落し文開けてはならじ秘密にて
よしきりや時代劇めく茶店あり

枚方 寺内洋子

川風に五線譜描く夏の蝶

大阪 飯塚智恵子

大梅雨やさかなの眼見開いて
紫陽花や天地の彩に染め始む
さみだれて水輪映るふ夕べかな
梅雨に入り雀の足の細さかな

煎餅の少ししなやか梅雨兆す
父の背にイルカのごとく子供の日
黒南風に海鳥たちの同じ顔
紫陽花や手帳に残す五七五
施設なか視界さへぎる梅雨じめり

さいたま 川村 治

絵筆とる好物の枇杷届きたり
君の目は世界へ飛び立つ夏の空
梅雨晴間紆余曲折の亀散歩
夏蝶や路頭に迷ふ人有りき
体操へ梅雨中急ぎベタル漕ぐ

和歌山 南條きわゑ

億年の地より零れて滴りぬ
著我の花水音高き用水路
茅の輪抜け巫女髪撫づる夕の風
お通しの蚕豆鉢に五つほど
パジャマ着て過す夕べや冷し瓜

さいたま 湯浅 和

問ひかけて横に首ふる扇風機
デイ渋る父をたらすや柏餅
在りし日の祖母の手解き梅仕事
寝かしつけ子よりも先に団扇落つ
夕涼や膳の真ん中祖父の席

若狭 松村登美江

ほろ苦いこの味が好き庭の露
朝餉には狭庭の豌豆香り立つ
夏野菜糠漬けとなり届く朝
薔薇の鉢抱いて初老の男下車
飛行機の爆音強し梅雨の空

藤沢 小島喜代子

涙涸れ希望の一步を白靴で
白靴に雨のぼつりと待ちぼうけ
立葵世間話を父の墓
沿線の警備よろしく立葵
学童の部屋を覗き見立葵

さいたま 緒方みき子

珍客は嘴黄色初夏の縁
雨ふくむ車列の響き初夏の暁
大輪の崩れ落つる音ぼたん園
言ひ訳に多忙と返し夏兆す
郭公や木立に透くるサナトリウム

さいたま 寺町知子

梅雨晴間ランチは銀座四丁目
白は嫌橙の鬼百合が好き
梅雨寒や紅茶に落とすブランデー
遊歩道由緒わからぬ百合の花
いかづちや墨暴走の書道展

綿貫ひさの

上着手に片陰を行く営業マン
著我の花独りぼつちの餓鬼大将
梅雨籠り夫の書棚にゲーム機が
あめんばうプリマドンナはレッスン中
父の日や「謝」の一筆が娘から

鈴木藻好

青空や夏うぐひすの声しきり
風うけて鳥あつまれよびは実る
裏庭のピンクの薔薇も満開に
親猫に甘える子猫梅雨の朝
六畳の仏間明るき百合の花

鬼石 加藤ナヲ子

白靴のゆるりと降るや外車より
白靴の外国人に日本語で
距離感の自然にとれて花葵
山小屋のデッキを囲む立葵
立葵子にせがまれて肩車

所沢 飯室夏江

なぜ急ぐ蟻を空から雲笑ふ
波音がすぐそこにある夏の宿
帆立焼きビールの泡の口笑ふ
万緑や車窓に飛び交ふ風の精
梅雨晴れて母の命日雲遊ぶ

さいたま 石浜悦子

六羽みな巣立つ燕のめでたさよ
あぢさゐの新種一株気にかかる
六月やかつ井もとむテストの子
犬の墓ほたる袋にゆるる夢
旋回し巣立ちうながす親つばめ

鬼石 榊原聰子

沢蟹や石の隙間に石となり
ちさき蟹マイムマイムの横走り
お前もか逃げ足速き川の蟹
短夜を寝るか起きるか迷ひ明け
短夜や新聞配達足軽し

東京 山中いちい

花菖蒲湧き出る水と戯れむ
父の日の鋭き睨み碁盤の目
父の日に極上の酒母の顔
玉川の細き流れや桜桃忌

東京 柳父はる

蕃椒花束となり吊るさるる
炭焼きの嶺に棚引く天の川
懐かしき友思ひ出す秋初め
鱗雲バスを乗り継ぎ浜辺町
武蔵野は大盃の謎新酒酌む

所沢 関根千恵

清少納言とふ凜と薄青花菖蒲
白靴の演武太極拳大会
立葵考の蔵書のソクラテス
新宿のビル街の夏同期会

宮代 関谷多美子

五月雨や天地をつなぐ糸電話
残り梅雨雲足そりり身を包む
仄明かり声なき寺の百日紅
百日紅散るを忘るる今日の僕

草加 持永喜夫

稚児詣り夏越の祓二拍手を
おみくじも販売機にて夏祓
滴りや旅は情けの今宵飲む
石段は右に左に滴りて

さいたま 落合和枝

梅雨寒しポストの中の督促状
梅雨寒や連立方程式を解く
点滅の信号ばやけ梅雨の街
女子会の百合の蕾も揺れてをり

さいたま 樋口元美

追ふてくる月を今宵は追ふてみる
秋風に同行二輪踏む遍路
食べられぬ烏瓜売る道の駅

駒谷行雄

夏帽子選ぶ母娘の背中かな
桐の花婚礼たんすは子に譲り
嫁に出す親の心境桐の花
側溝から覗く顔ありやまかがし

川島夕峰

湘南に憧れ住みて八十の秋
夏迎へ観音二王に六地藏
菌騒ぎをれど負けずに盆踊

藤沢 藤田寛二

戦争のリアルタイムや梅雨の冷え
鬼百合やうつかり薬の染みる朝
伽羅露の仕上げに煽る鍋返し
酸っぱ味は樽の底にぞ梅雨寒き

糸井しるく

☆

☆

作品評

山本鬼之介

琵琶胸に飛天の笑みや梅雨の闇

池田珪子

飛天は、仏教で諸仏の周囲を飛行遊泳して讃える天人のことで、仏像の周囲（側壁や天蓋）や寺院の格天井などに描かれている。飛天の優美な姿絵は、古くガンダーラ美術やインドのアジャンター、中国の敦煌や雲崗の石窟寺院において見られ、日本では、法隆寺金堂の壁画や薬師寺東塔の水煙、平等院鳳凰堂の後背、法界寺阿弥陀堂の壁画などに古い時代の作例が見られる。

阿弥陀如来などの仏を中心に、花を散らし楽を奏し香を薫じたりして優雅に舞う姿を観ると、言葉には表せない感動を覚える。楽を奏する飛天は、横笛・縦笛や笙、鼓や琵琶などの楽器を携えて自らが楽しそうに舞っている。

飛天画の他に飛天の像もあるそうで、掲句の飛天がどちらのものかは不明であるが、作者は今、琵琶を奏する飛天と自分だけの世界に没入しているかのようである。梅雨時の暗さを強調する季語が、飛天と作者の一体感を示している。

名水を育む山の緑濃し 越田栄子

本句に刺激されて「日本の名水百選」を改めて確認した。俗に言う日本百名水は、一九八五年（昭和六十年）三月に、環境庁（現・環境省）が、全国の名水とされる湧水・河川・地下水の中から百ヶ所を選んで制定したもので、北は北海道から南の沖縄まで分布している。われわれ水明人に縁の深い水として、福井県三方上中郡若狭町の「瓜割の滝」が湧水で、同県小浜市神宮寺の「鶴ノ瀬」が河川で百選の中に入っており、とても嬉しく誇らしく思う。

普段、スーパーで購入したり生協の宅配で入手した水を飲んでいながら、山の地層で浄化された水は、そう思っただけで美味く感じるし、真夏の緑に包まれた山からこんこんと湧き出る水を思い描くと、その美味しさが倍加する。この俳句は、天然水のコマージュにぴったりである。

螢狩そつと肩借り目を凝らす 清水桂子

筆者が高齢になってからの螢狩は、サイクリングの旅行で福島県南会津郡下郷大字大内の「大内宿」に宿泊した時で、民宿の女将さんの案内で螢の集まる穴場へ出掛けた。残念ながら、本句のような艶のある場面は皆無であったが、みな子供のように歓声を挙げていた。

作者の作意はともかく、筆者としては、この句の場面を螢と一組の男女に絞り込みたい。男性が低い姿勢でいる処へ後ろから女性が寄り添い、男性の肩に手を添えて螢の明滅の様子を凝視している、という構図である。こういう螢狩を一度味わってみたい。

万緑を駆けて駆けてや日本海 梅澤輝翠

季語の万緑という言葉がもたらすものは、その場所や景色と対峙する人間の生命力ではなからうか。いま緑一色に包み込まれた道を行っている人の眼前に、きらりと光るものが見え、次第にそれが大きく広がってゆく。遂に光り輝く夏の日本海に到達した。久方ぶりに故郷を訪れた作者の心の高鳴りを表した一句と解した。

水音のかすかな誘ひ螢狩 阿部幸代

螢の棲息に欠かせないのが水の在る場所と餌になる川蜷であるから、螢狩の場所も自ずと水のある処になる。螢の放つ光もさることながら、水音を頼りに螢の居る処へ近づくという行動が理に適っている。「かすかな誘ひ」で清らかな流れの様子が伝わってきて臨場感が増幅する。

軽梟の子の一羽ときをり列乱す 岡田宣子

都会の人工池から母鳥に引率された軽梟かろの子が、七八羽よちよち歩きして車の通る道路を横断する光景をテレビで見た人が多いと思うが、実に長閑で心が癒される。人間の子供も同様で、昔の子沢山の家には一人か二人親の手に負えないのが居たので、この俳句の母軽梟の苦勞がよく判る。軽梟の子が全部道路を渡り終えると、辛抱強く（軽梟の子の）お通りを待っていた車の人達が、安堵の笑みを浮かべてスタートする。母鳥もほっとしたことだろう。

萍の僅かな隙に射す光 菅原真理

春に緑を噴き出した萍が、夏には水面に隙間が無くなるほどの勢いで繁殖するその生命力がすごい。それに対して太陽光のパワーはさらに強力で、萍の僅かな隙間にも射し込んでくるといふ、なかなか観察の効いた俳句である。

君去りし海を見てゐる夏帽子 綿引まり子

夏の海を見下ろす丘に佇むひとりの女性。そよ風に揺れる夏服に、色の濃い鍔広の夏帽子がよく似合っている。さて、「君去りし海」をどのように解釈したらよいのだろうか。「この世を」という導入部が省略されているのであれば、海難によって亡くなったひとであるが、そうでなければ、外国航路の船乗りということになるか。この場所を横浜か神戸のよ

うな港町に設定すれば、BGMの演歌が聞こえてくるようで、なかなか洒落た雰囲気になってくる。

先の世はおしやべり人か火取虫 篠崎紀子

灯火を慕って家の窓や街灯に集まる蛾や黄金虫など、夏の風物の一つであるが、それに輪廻転生の論理を当てはめたところが面白い。他人の迷惑を顧みず、べらべらと喋り捲る人。言われてみればその通りと納得した。

月と戯るる神社の庭の濃紫陽花 皆川更穂

七変化の別名どおり、紫陽花は経過日数や土質によって色を変えるし、雨や太陽の光によっても見た目の色が変わるような気がする。夜の世界で月と戯れている紫陽花は実に艶めかしい。その場所が神聖であるべき神社の庭となれば尚更である。

吾の足に蟻登らむと思索中 丸屋詠子

夏季、地面や木の幹などを活発に歩き回る働き蟻。その動きを観察していると、何らかの目的を持って行動していることは窺い知れるが、専門の学者でない一般人にはそれ以上のことは判らない。

或る時作者が自分の足首辺りでうろついている蟻を見付け

た。足首から上に登ってゆきたいが、途中ではしつと叩き落とされるのではないかと思索しているように思えたのである。

剣道場静かになりぬ桐の花 小林京子

桐の花から、その昔城下町であった地方都市の剣道場を想像する。豆剣士や女性剣士も混じっての休日の朝稽古が終わり、男達が井戸端で談笑しながら身体の汗を拭いている。井戸の脇には桐の古木があり、初夏によい香りの紫の花を咲かせる。神道無念流・馬庭念流・無外流など、時代劇で馴染みの流派が、今なお継承されているようで、嬉しくなった。

闇知らぬ街のはざまの螢狩 菅原卓郎

螢は人工的な明るさの無い場所で観るのが理想的であるうが、たまたま螢の棲息の条件が適って、街外れの一角にあえかな光を放っていることもあるのかと思う。本句は、こういう状況を詠んだものと思うが、作者の実体験のようにも受け取れる。

夏雲を仰ぐ老松主顔 山岸久美子

雄雄しくそそり立っている夏雲に、とある屋敷の年老いた松の木が対峙している。この両者を包み込んだ景色は、毎年夏の間に度々見られるものであるが、恰も永年この屋敷に住

み暮らしている老爺のごとく、夏雲と言葉を交わしているか
ようである。主顔が威厳のある老松の様子を捉えている。

昼寝覚夢に妻子置き忘る 森下山菜

実に不思議な感覚の俳句である。昼寝をしている間に、若
かりし頃の家族団欒の夢を見ていた。目が覚めると、さつき
まで居た妻や同居している息子夫婦の姿が見えず、自分独り
になっていて不思議な気がした、と解釈してみたが如何であ
ろうか。

青芝に座して語らむ人生論 新 曆文

四五人が気持の良い青芝に座って滔滔と語り合っている。
大学の構内での一景とも受け取れるが、人生論という内容を
考えると、かなり時代が溯るような気もするが、案外現代版
で通用するのも知れない。

河鹿笛 往時を遺す 芋車 西幅公子

山の水が疎水を勢いよく流れる山里の風景である。里芋を
容れた籠が水の力でくるくる回り、里芋の皮が綺麗に剥けて
実に爽快である。以前若狭の熊川宿を訪れた時に筆者も芋車
を目にしており、水車と同様に、電気の無かった時代の人の
知恵と自然に即した日常生活の様子が伝わってくる。河鹿笛
は、今の世の人々に呼びかけている旧き時代の里人の声とも

受け取れる素朴な響きである。

夏柳水面に映る築地堀 反町 修

江戸時代から明治の頃を思わせるしめやかな町景色である。
緑葉をいっぱい付けた柳の枝がどいている水面に、どっし
りとした築地堀が映り込んでいる。裏門から人が出てきて何
かが起こりそうな予感がする。

遠雷や話題途切れぬ馴染み客 村杉清吉

寿司屋か小料理屋のカウンターであろうか。前者なら寿司
を握る板前、後者なら小鉢に煮物を取り分ける女将といった
ところだろう。新聞・週刊誌やテレビなどで仕入れた話題を
とくとくと喋り続ける客の話に適当に相槌を打っているが、
なかなか骨が折れる。折からの遠雷は、その客に、もういい
加減にしろよと言っているようだ。

マンシヨンの狭間の家の百日紅 本橋稀香

数年前までは広い敷地の戸建ての家が並んでいた静かな住
宅街であったが、マンシヨンに建て替えたり、建物ごと売却
して移転するケースが増えてきた。マンシヨンに囲まれて日
当りが悪くなり、風通しも悪くなった古い戸建ての家である。
毎年夏から秋にかけてのシンボルマークになってきた百日紅
が、その家の存在感を誇示している。

水琴窟

(水明集七月号鑑賞)

池田雅夫

頂に火の手を上ぐる躑躅かな 秋谷風舎

躑躅の名所は、都内では根津神社、旧古河庭園などがある。山の頂となると葉山の「花の木公園」がある。山頂からこぼれ落ちるようだという。高さ5mの館林の躑躅かも知れない。

春の夕近頃猫に似て気儘 小山あつ子

うっとりとかすむような「春の夕」。あわただしい日々も過ぎ静かな日を送っている。することもなく気の趣くままに過ごしている。猫と遊んでいると自分も猫になったような気がしてきた。「近頃猫に似て気儘」に共感する読者も多い。

駅を背にぱつと開くや春日傘 橋爪さなえ

華やかさの中にも楚々とした趣のある「春日傘」。稲畑汀子は〈旅先に用意のおしやれ春日傘〉と詠んでいる。旅先の駅に降り立ち「そちこち名所を巡るぞ」という意気込みが、「駅を背にぱつと開くや」に感じられる。春日傘が効果的。

竹林の葉のささやきにのどかさ 小川洋子

風に揺れる竹林の音さえ「ささやき」に聞こえる静かな日の「のどかさ」。その発想、感性を賛えたい。韻文らしくするには同意語、同義語を省くことが肝心。たとえば「竹林のささやくやうにのどかな日」としても句意は伝わる。

すれ違ひ掲げ傾げる春日傘 山戸美子

狭い道で傘を差しながら対向者とすれ違ふ。お互いを気づかない、一方は傘を高く掲げ、もう一方は傾げたのだろう。思いやり、人情が薄くなったと云われるがなかなかすてたものでもない。「春日傘」の趣にぬくもりが感じられる。

房総の海なめらかに目刺干す 森 美枝子

黒潮と親潮が交わる房総の海。「ひねもすのたりのたり」と詠われるほど穏やかな春の海。「海なめらかに」の措辞に魅了された。そこから「目刺干す」の展開の意外性にも驚かされた。房総の漁師の生活ぶりが目にうかぶ。

春眠や待合室の白き壁 杉浦千祐

この待合室はどこであろうか。おそらく病院、それも薬局の待合室ではなからうか。診察を終えてほっと安心し、薬局で薬の出るのを待っている。静かな「待合室の白き壁」が体調の安定を物語っている。ついつい眠気に負けてしまう。

うつすらと秩父連山鳥雲に

森 和子

秋冬に渡ってきた鳥類が春になって北方へ帰ってゆく。その鳥の一群ずつ雲間に消えてゆくのを「鳥雲に入る」という。どんよりと曇ったある日、秩父の上空を飛ぶ鳥の群。折りしりも春塵のころ、「うつすらと」かすむ「秩父連山」であった。

がながんと櫻の芽ぶき押し来たり

柳父はる

「櫻の芽ぶき」を賛えるのにこれほど力強く詠んでいることに驚愕した。櫻の巨樹であるならば、「がながんと…押し来たり」がいかにも相応しい。二〜三ヶ月前までは裸木であったのに今は「芽ぶき」、その生命力に圧倒されている。

帰り坂傘のない子に春時雨

山中いちい

「雨々ふれふれ母さんが…」の童謡を思いうかべる。明るく艶やかな「春時雨」に濡れながら平気な顔の少年。「帰り坂」のひびきが新鮮である。「傘のない子の帰り坂」としたほうが自然であろう。あれこれと推敲も楽しいことなので。

夜桜に誘はれふたり千鳥足

佐野友夏

桜の名所ではなさそうだが、街灯に照らされた桜、あるいは提灯が設えてあるかも知れない。その桜に誘われて夜桜見物にやって来た。持参の酒にほろ酔気分。酒場でもう一杯!!

在りし日の糸たぐり寄せ桜並木

嶋田洋子

永年住んでいる町に桜の時期がやってきた。街道の「桜並木」はずでに満開である。若かりし頃、二人で通った道だけが昔のまま変わっていない。いつもこの桜並木で待ち合わせをして…。「糸たぐり寄せ」に万感の思いがこもっている。

春昼や居眠りのほほつつかれり

榊原聰子

春の陽気について、うとうとと「居眠り」をしてしまった。その姿を見ていて、ちよつとおちゃめに頬をつついてみたのだ。「つつかれり」の受け身であるから、一体誰がつついたのか知りたくなる。且那樣か幼い子か。楽しい句である。

春蟬の声天空に幕を張る

吉田十三子

「春蟬」とは云うものの季題としては夏である。他の蟬にさきがけて鳴き始める。「松蟬」とも云い、松林などで鳴くことが多い。埼玉・草加には「草加松原」といわれる通りがある。「天空に幕を張る」ほどにしきりに鳴いている。

千駄木のつつじの坂にきつねあて

藤川比早子

東京・千駄木界隈では「文京つつじまつり」が盛大に催される。団子坂など坂の多いところでもある。近くの根津神社のつつじ苑はとくに有名である。狐の嫁入りに会うかも…

大村節代 選

鼓
笛
集

つば広の夏帽子やや謎めきて
蟬時雨泣かぬと決めて早四年
ソーダ水八十路の今もソーダ水

清水桂子

余生なほ素直がよろし心太
雪溪の入る絶景河童橋
風鈴の残る「売家」の寂しかりけり

新 曆文

夏掛や度忘れしたる役者の名
とりあへず麦酒と言ひて野球見る
新しき傘にぼつんと青時雨

丸屋詠子

何処にぞ殿をらむ蟻の列
大物になれとたつぶり天瓜粉
荒南風や跡目危うき澤瀉屋

小林京子

早苗田の広がる大地水の星
新種の名を尋ぬるもよし朝顔市
万緑や境界線は無きごとし

菅原真理

雷や舞台のやうなパノラマを
罪悪の冷やしラーメン盛夏なり
炎天下にをらずやれる仕事かな

吉川拓真

葉隠れの青梅ほのと紅をさす
山門に一札をして蟻二匹
夏めくやゲートボールの足軽し

綿引まりこ

怪談の物の怪今や友のうち
ネット世代も母の手恋し帰省する
七夕の飾り小さな瓶の枝

杉浦千祐

夏の夕湖岸に立ちて落日を
北岸に釣り人独り雲の峰
乙女座が三人揃ひメロン食む

しつらひの決め手は青き玉簾
陸亀や玉菜の味の分かるやつ
ガーベラを添へてリクガメ家族葬

日雀鳴く餌探し来る今日も又
心太六十余年のランチ友
降水帯悪魔の川や夏の雨

大伸びのたんび伸びる背なつやすみ
あつぱつば長屋に揺るる自治の札
日日草日々努めて穏やかに

短夜やマニキュア拭ひ泣いてみる
明易く鏡に残るつけ黒子
短夜や二時間前の泣き笑ひ

夏祭元気な声も夜空まで
朝顔の上へ上へとのびる朝
ひさびさに夜店の味を楽しんで

森下美智枝

小駒さち子

南條きわゑ

遠藤人美

持永喜夫

加藤ナヲ子

胸元に抱き込む赤子素足垂れ
花代を縦に吊るすや盆踊り
西日うけ白壁に陰影の作

早星地に伏し祈る子等もゐて
身を尽くす異邦の堰に夏の星
水鶏啼くペシヤワールに明の星

篠原さよ子

藤川比早子

鼓笛集巻頭（八月号）

私の好きな一句（自句自解）

岡田宣子

寒月や深夜の保線鳴り響く

東京方面から大宮区間のJR五路線が通る沿線に住んで二十五年、年に数回終電から始発までの保線工事がある。

空気の澄んだ寒い時期の深夜のある日、一際工事の音が響いてきて目覚めた時の一句である。日中、電車がひっきりなしに通過する線路内での作業を見掛ける時もあり、列車の運行を安全にといい思いで真摯に保線に従事する作業員の安全を願わずにはいられない。

鼓笛集作品評

大村節代

ソーダ水八十路の今もソーダ水 清水桂子

ソーダ水のリフレインが何とも楽しい。ソーダ水は、炭酸ガスを水に溶かした飲物というと、味も素気もない。しかし果物のシロップや香料を加え、赤、緑、青の色をつけたソーダー水の弾ける様を、いつもの喫茶店のいつもの席で見つめるのは、何にも代えがたい至福の一時である。

雪溪の入る絶景河童橋 新 曆文

上高地の梓川にかかる河童橋そして、穂高岳の雪溪まで加わり、夏の景のここに極まれりと誰しもが思う。その景を目を瞑って想像すると、少し涼しくなったような思いがする。

夏掛や度忘れしたる役者の名 丸屋詠子

近頃人の名前が、役者の名前が出て来ない。

「ほら、あの役をやった人よ。」「そう、今朝もテレビに出ていた。かっこいいね。」これで会話が成り立つ、何とも平和でいいですね。

俳句

10月号
予告

9月25日発売

特別作品 大木あまみ・坪内稔典・藤本美和子

予価1,100円(本体1,000円)税別

似て非なる文学の極北

俳句と短歌

高橋睦郎

大 特 集

▼総論 俳句の本質……………
「解説」それぞれの発祥と歴史
「各論」似て非なるもの(切れ/抒情/私性ほか)
「論考」Aと俳句・短歌/俳句に活かしたい短歌の技
「シンポジウム」短詩型文学への期待
宮坂静生・柳田邦男・川野里子
「コラム」歌人が選ぶベスト俳句10

特別企画

六か月連続シリーズ!
全国結社マップ Vol.1 東京

句集特集 日本の俳人100 橋本榮治句集『瑜伽』

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

網野月を選

山紫集

出不精と頭痛を連れて梅雨来たる

山中いちい

梅雨じめり細き腕に止血帯

曲淵徹雄

梅雨入や濡るれば花の浮く傘を

丸山マスマ

味噌蔵の引戸重たし戻り梅雨

松宮保人

縄湿める縛られ地蔵梅雨雲

笹本啓子

生薬のほふ手のひら走り梅雨

石川理恵

打ち寄する昏き色あり梅雨の海

越田栄子

荒梅雨や深海漁には障りなく

梅澤輝翠

梅の雨丸く膨らむ小銭入れ

檜鼻ことは

去ぬること出来ぬ憂き世や梅雨湿り

山下ユリ子

以上特選

梅雨の闇増殖しやすき嫉妬心

畑宮栄子

梅雨も佳し銘菓「あを梅」届く頃

原田秀子

母譲りくせ毛のうねる梅雨はじめ

樋口元美

梅の雨行列の傘色々と

日高道を

子の背丈印す柱も梅雨湿り

福田千春

走り梅雨幼稚園児が跳ね回る

保坂翔太

梅雨夕焼日高御坊の門前町	正木萬蝶	待合室の無口な患者梅雨湿り	湯浅 和
梅雨入りと言はれてよりの晴れ五日	町野広子	寄り来たる猫なんとなく梅雨湿り	横山君夫
梅雨の雷田の神様の泣き笑ひ <small>かきまゐ</small>	松井由紀子	取説を未だスクロール長梅雨	横山礼子
早梅雨旅荷振り分け弥次郎兵衛	松本光子	大喜利の頬の弛みや梅雨夕焼	青木鶴城
梅雨入や古き良きジャズラジオから	丸屋詠子	柿落果梅雨の重みに堪へかねて	秋谷風舎
青梅雨や実生の苗木分かちたり	宮崎チアキ	長梅雨や遺贈加はふる遺言書	新 暦文
ユニフォーム抱へて梅雨のランドリー	本橋稀香	梅雨の夜灯影に去年のドライフラワー	阿部幸代
新聞を拡げ爪切る梅雨の夜	森 和子	梅雨寒し心に重き一つの訃	荒井俱子
打つ釘の曲り苛立つ梅雨湿り	森川義子	エアコンの工事延期や墜栗花雨	飯田忠男
梅雨いそいそモネの絵柄の傘開く	森下美智枝	寄せ墓に「エビス黒生」梅の雨	池田珪子
地下鉄のA4出口梅雨晴間	森美枝子	梅天の一面黒き一日かな	池田雅夫
梅雨はげし亡き人偲び香を焚く	山岸久美子	とり留めの録画リストを梅雨に入る	石田慶子

実盛の墨染めの髪梅雨が梳く	井上燈女	荒梅雨や日本列島水浸し	小駒さち子
荒梅雨の濁流窓に旅の宿	井上玲子	良く話しよく食べる客梅雨晴間	後藤綾子
裏山の声重なるや梅雨晴間	上戸千津子	夕べかと醒むれば日中女梅雨	小林京子
自画像の斜めに構へ梅雨館	内田恵子	梅雨の朝優先席のスマホ達	近藤徹平
鎌倉や矢倉さまよふ梅雨の蝶	梅澤佐江	梅雨闇や施設の明り力えて	榊原聰子
梅雨夕焼葉ごめの中の実梅かな	大塚茂子	梅酒漬レシビ通りにビンに漬	佐々木史女
帰郷せり梅雨の晴間の滑走路	大場順子	ナーバスな空だいきなり梅雨に入る	篠崎紀子
梅雨深し喧騒沈む副都心	岡田宣子	番傘の濁く音さく梅雨の宿	渋谷さいち
桑名より梅雨入動画のライン来る	葛城千世子	大きめの合羽びちやびちや梅雨夕焼	下川光子
幾何難題補助線引けば梅雨夕焼	加藤でん治	酔客の「もう一軒」の梅雨の闇	菅原卓郎
青梅雨や玻璃窓大きレストラン	熊倉千重子	梅雨深し音を無くした日暮れ街	菅原真理
くんくんと犬の鼻めく梅雨の家	河野はるみ	足濡らす水たまり「ああ」梅雨の夜	杉浦千祐

梅雨入りや吾子のラインはパリカフェー

鈴木藻好

玄関に赤い長靴梅雨湿り

鳴海順子

梅雨曇差れし少年ジャンプかな

鈴木玲子

梅雨の星待ち焦れたる夫婦る

南條さわゑ

長梅雨や居酒屋女将天仰ぐ

関谷多美子

一番星見つけはしやく子梅雨晴れ間

西浦千枝子

梅雨に厭きたラクンパルシート踊ろう

瀬戸雄二郎

梅雨曇りシーソーの婆大笑ひ

西幅公子

青田売り青田買ひあり梅雨晴間

染谷風子

持て余すパズルのピース梅雨湿り

野口和子

男梅雨草木の茂るエネルギー

反町 修

青梅雨や小さき額に「祝婚歌」

野田静香

梅雨寒や余つて仕舞ふ螺子ひとつ

高島寛治

梅雨湿りどんと作りし信太鯨

野村美子

梅雨晴や竿売りの声風に乗る

高橋満耶子

梅雨空の一変青の白き雲

武田重子

☆

☆

ロープウェー梅雨空の中吸ひ込まれ

田中章嘉

青梅雨や物憂げに鳴る寺の鐘

寺内洋子

膝抱へ仏頂面なる梅雨湿り

飛永 鼓

山紫集作品評

網野月を

出不精と頭痛を連れて梅雨来たる

山中いちい

梅雨を否定的に捉えているようにも感じるのだが、果たしてどうであろうか。「出不精」を生来の性格によるものと解すれば、梅雨が「出不精」の言い訳になるかも知れない。

「頭痛」これはいけません。確かに厄介なものを持ち込まれている感が大である。一読では鑑賞しきれない複層的な意味合いを含有している句のように筆者には思えるのである。「連れて梅雨来たる」ということは梅雨が明ければ「出不精」も「頭痛」も霧消してしまうとは考えられないであろうか。

梅雨じめり細き腕に止血帯

曲淵徹雄

この「止血帯」は血液検査などの後に数十分間している、伸縮性のある例の青いバンドのようなものではないかと想像した。決して大怪我した後の出血を止めるためのものではないだろう。それでも「細き」に痛々しさを感じるのだが、それは上五の季語「梅雨じめり」のポジティブとは言い難いイメージ

に偏った本意から導き出される句全体の意味合いにある。

梅雨は一般的にネガティブに捉えられるのだが、農事には不可欠のものであるし、夏の渇水への備えにも大きく貢献している。人間の暮らしの一年というサイクルから考えれば、ネガティブに捉えるだけでは済まされないものがある。作者の意図が何処にあるのかは推測するしかないのだが、何か大きな自然の摂理を感じずにはいられない。

梅雨入りや濡るれば花の浮く傘を

丸山マスマ

上五の切れ字「……や」に対して座五の「……を」の所謂流している用法から、この句の場合その後の動詞を省略しているように解釈した。省略は、例えばシヨップで購入した、納戸から出して用意した、などということである。座五の後の省略によって、上五の切れ字の切れ味が倍増しているし、省略そのものが句全体に余韻を作り出している。

作者の細やかな配慮が窺い知れる句であり、遊び心も横溢している。はたしてどのような傘をさされているのであろうか、見てみたい。

味噌蔵の引戸重たし戻り梅雨

松宮保人

梅雨湿りの所為で「引戸」が重たさを感じさせるまでしっかりと閉じられている、ということなのである。木製の「引戸」ならではの変化であって、サッシなどではこうはいかない。多分、作っている味噌にとっても望ましい効果を齎しているのではないだろうか。重たさの中に自然と人の生活の接点を

感じ取り、うまく調和していることへの有難味を感じ取っている。

縄湿める縛られ地蔵梅雨曇 笹本啓子

「縛られ地蔵」は、全国に何か所か存在が知られているらしいが、何といっても業平山南蔵院の「しばられ地蔵」が有名である。大岡越前の伝承のそれだからである。文字通り縛られているのであって、地蔵尊にして御勞しいお姿なのであるが、そのお姿で衆生をお救いくださるのであるから、庶民の無邪気なまでの信心の在り方を雄弁に語っている。「湿める」と座五の季語「梅雨曇」に緊密性を感じるが、諄くないところで踏みとどまっている。曇り空くらいで「湿める」縄の質感が演出されているようにも思える。

生葉のほふ手のひら走り梅雨 石川理恵

生葉は水分を含むことで発香するものが多くあって、座五の季語「走り梅雨」の季節には、日常茶飯のことなのかも知れない。日常の中では、例えば職業茶などを作ることもあって、生葉を元に手製の工夫を施すようなことにもなっている。中七の「手のひら」から両手を広げて、手に移った匂いを確かめている作者の所作が見えて来る様だ。日頃の生活の中の出る事を活写していて、題材に銜いが無い。

打ち寄する昏き色あり梅雨の海 越田栄子

初夏の海色の明るさと真夏の海色の華やかさに比して、梅

雨の海の色合いの地味さは「昏き色」に相当するのである。が、作者は「梅雨の海」の「昏き色」を嫌いなもの、駄目なものとしては捉えていないのである。明るさがある一方で昏きもあるのであって、永い歳月の海の営みの循環に安寧さえ覚えているのではないだろうか。中七に取えて「……あり」と表現して確認し、納得しているように読める。

荒梅雨や深海漁には障りなく 梅澤輝翠

文字通り解釈すれば、いわゆるトロール漁業には荒梅雨の影響が及ばないのである。ということになるのだが、そう単純なことではないだろう。「深海漁」として中七に整えられるところを作者は敢えて八音にしている。中七にしてしまえば、「荒梅雨」にも関わらず、という意味と解釈されかねないのだが、上五の「……や」切れに依って完全な断絶を作り出したかったのではないだろうか。作者に問いたいところである。

梅の雨丸く膨らむ小銭入れ 檜鼻ことは

こういう句は深読みして解釈すると作者の罫にはまるのである。あくまでも文字を追って意味を捉えて、句の意味にユゝモアを感じ取り共に笑ってしまうことである。

去ぬること出来ぬ憂き世や梅雨湿り 山下ユリ子

上五の「去ぬること」とはまさか生きることからの逃避ではないだろうが、いわゆる「憂き世」の義理から辞めることも出来ない何かを負ってらっしゃるのではないだろうか。典型的な型に嵌めて句意の深みを増している。

句集喝采

曲淵徹雄

◆大竹多可志「日立」

文學の森

著者略歴 昭和二十三年茨城県日立市生。昭和三十七年「かびれ」入会。昭和四十五年かびれ新人賞。昭和六十三年かびれ賞。平成十四年「かびれ」主宰を継承。平成二十二年茨城文学賞（俳句部門）。平成二十三年茨城文学賞（評論・エッセイ部門）。平成二十六年俳誌協会賞編集特別賞。平成二十七年茨城新聞社賞（文学部門）。俳人協会評議員。俳人協会茨城県支部支部長。茨城県俳句作家協会顧問。

著者の第八句集として、平成二十六年～三十年の四〇〇句を収載。著者あとがきに、ふるさとの日立を離れ東京に来て五十七年。七十五歳となり、故郷の名の「日立」という句集を刊行したいという願いが叶ったと記す。

野心もつ齡にあらず野火の夜

雲水の笠の疲れや牡丹雪

現役の職を退いてからの感慨が思われる。

パソコンの文字の砂漠や八月来

短日や風に追はれて乗る都電

対象を見つめ、心象を伺うことのできる表現で一句に。

地球儀の海の騒つくレノンの忌

寒桜流人の墓を風が研ぐ

鋭い感覚で詠まれている。

他に、「少女らの会話つつぬけ青林檎」、「悲恋など知らぬ己が身十三夜」、「日向ほこ仏のやうに生きてゐる」など、日常の生活を詠み、俳味のある句にほのほのとす。

◆長石 彰「記念樹」

本阿弥書店

著者略歴 昭和三十六年鳥取県生。平成六年「築港」入会。平成十八年「玉梓」入会（同人）。俳人協会会員。鳥取県俳句協会会員。

著者の第一句集。平成十八年から令和四年までの句を収載。名村早智子氏の序文と著者のあとがきに、教育者として多忙な生活のなかで俳句を続けてこられ、俳句人生の節目として本句集を上梓されたと記す。句集名は、学校生活を題材にした「記念樹も大樹となりて小鳥来る」などの句より。

シクラメン相談室によく来る子

教頭の残務整理や団扇もて

春砂丘どの子も走れみな走れ

ちちる鳴く校長室に大金庫

草笛を子らに吹きやる元校長

どの句も教職者としての日常が丁寧に詠まれている。

膝の子の旋毛が二つ新樹光

喪主となるその朝父の着膨れて

梅寒し母アトリエに籠りゐて

とんど焚く村に子どものある限り

烏賊釣火砂丘は黙を深めをり

第一句～第三句、家族を詠んだ句。第四句、第五句、郷土愛の句。他に、「保護色はどこにでもあり枯蝸螂」、「折鶴は鋭角ばかり十三夜」など独特の観察眼で詠んだ句がある。

水明夏行

第一日（七月二十九日）

日高道を

久しぶりの三日間開催の初日、恒例により
第一来場者の石山かつ子さんの抽選により、
席題が「蠅」と「下」の詠み込みの二題に決
定、主宰を含め三十名の出席者が各自三句の
投句を経て句会が開催された。

主宰詠

下馬評のファーストレディー薄衣

旧家の葬儀芳名録に金の蠅

落し前つけたる席に出づる蠅

主宰選

銀幕に一点の蠅動かざる

枒酒に溺るる蠅や我もまた

蠅の眼の中に抜ぐる天地かな

草笛や眼下に撓む千曲川

更 穂

〃

〃

昇

下戸二人神酒所を守る夏祭り

上下なき海月の傘や水族館

大盛のチャンブルに海人と蠅

蠅たたく連敗記事の新聞紙

縞蠅やガレの模様になりすます

「下」と記し上意と読める日雷

下宿屋の西日射し込む四畳半

△伏して読む「砂の女」や夜の蠅

下馬札の奥の神橋道をしえ

下車駅か最早過ぎ行く昼寝覚

片蔭を拾ひて仰ぐ日和下駄

教室に蠅一匹の攪乱者

炎天下たどりつきたる鯨幕

下がり潮こそぞとばかり蟹つかむ

図書館の誰も気付かぬ蠅の音

夜の秋三味の稽古は三下り

以上特選

夏の星詰めて下山のリユックかな

下剋上の相手はいづこ雲の峰

夏山や下界の村はまじろみぬ

上手下手拍手そろへ盆踊

平積みめのグルメ雑誌に蠅の音

デリシャスと下顎さすり鰻食ふ

稀 香

〃

曆 文

節 代

月 を

延 昭

喜 恵

マ ス ミ

徹 平

風 子

真 理

か つ 子

輝 翠

六 弦

道 を

〃

喜 恵

節 代

久 美 子

徹 雄

昇

曆 文

どうどうと鶏舎の蠅は逃げもせず 章嘉

下野や干瓢を干す庭白し 修

夜の宴会済んだる後の蠅一匹 かつ子

下校子の汗の制服脱ぎ捨てる 稀香

牛の尾を巧みに避けて蠅の舞ふ 和

父母をよけて蠅抜く北の窓 京子

歩む蠅父の墓前の握り飯 月を

夕餉の卓小鉢に小蠅滑り込む 多美子

「下乗」なる立て札うすれ青葉寺 和葉

蠅払ふつい口を突く国訛 マスミ

酒好きの蠅と同居の下宿生 延昭

夏の果下天を統ぶるうつけいもの 鶴城

下戸ですと言ひつつ旨し冷し酒 輝翠

夏邸樹下美人図の金屏風 静香

鼻汁顔に蠅が慰む泣き坊主 公子

払ひても払ひても来る廁蠅 風子

浴衣着て赤い鼻緒の駒下駄を 美智枝

蠅一匹あみど玻璃戸の間かな チアキ

剣豪が箆屋の蠅をつまむ箸 徹平

武田菱の和菓子箱にたかる蠅 六弦

デパ地下でハワイアン聞き夏料理 真理

金蠅の堂々として膳の上 道 を

第一日目の互選による高得点は次のとおり。

- 一位 日高道を
- 二位 五明 昇
- 三位 皆川更穂
- 四位 近藤徹平
- 五位 境 延昭
- 六位 大村節代
- 七位 曲淵徹雄
- 八位 丸山マシミ

第二日 (七月三十日)

染谷風子

連日の猛暑の中、夏行二日目が二十四名の出席を以って敢行された。席題は「夏菊」と「深」の詠込みとの二題、三句投句である。投句締切は一時四十五分、時間厳守である。会場の広い空間には、参加者全員の熱気と緊張感が漲っていた。

互選に続いて主宰選発表である。主宰選は本日最大のイベントであり、参加者は一様に緊張し耳を敬てた。その後主宰より本日の作品について個別に、丁寧かつ詳細な講評があり、その際特に注意すべき点として次の二点の指摘があった。

一、文語の二段活用動詞は終止形と連体形とで形が違ふ。文語文法の基礎を良く復習しておくこと。

二、過去に埋没した季語及び絵の中、本の

中の季語は季語の役割を果さない。季語は必ず現在のあるものとして詠むこと。
右は主宰が常々話されていることである。

主宰詠

夏菊に世俗の彼の日惚ぶ尼
憧るるひとの夏帽深みどり

中庭や京の町家に夏の菊

主宰選

夏菊の白は鸚鵡のねむる墓

夏菊やをんな主になをと客

夏菊の満ちて寂しき過疎の村

深海に男のロマン夏の果

味はひ深き大和ことばや夜の秋

夏祭深川にある江戸の影

夏菊や墓石に残る焦げの跡

夏菊や儂き刻を野仏と

深井戸に西瓜つり下げ覗く闇

土熱る闇に淡しき夏の菊

Ⓢ 深海に眠る大和よ八月来

——以上特選

深読みす彼の一言青葉闇

夏菊に語り掛くれば母のこと

夏菊や深谷青淵五頭身

深山の苔むす尾根の氷室かな

延昭

〃

道を

〃

チアキ

昇

鶴城

はるみ

秀子

更穂

風子

はるみ

道を

徹平

京子

夏菊や仏師は畏れつ彫り進む

深海の使ひの魚の弱々し

僧を見し三年坂や夏の菊

去り際の言葉意味深青芒

夏菊を活けて駅舎の案内所

夢現深夜の雷に驚きぬ

庭の隅夏菊にそと水を遣る

古寺の深閑破る牛蛙

夜の秋西鶴の女の深情け

夾竹桃の花を支ふる深緑

深々と根を張り浮ぶ蓮の花

尼寺の炎天の庭深閑す

垣根には夫の好みの夏菊を

深酒に後悔の無き夏祭

白夏菊を別れつらいと柩へと

夏菊や作務衣の乾く庫裏の庭

深読みめ哀しき相よ罍粟の花

早逝の君に手向けむ夏の菊

夏菊や母子揃ひて路地育ち

互選による高得点は左記の結果となった。

一位 染谷風子

二位 境 延昭

三位 五明 昇

四位 青木鶴城

五位 宮崎チアキ

六位 石井喜恵

七位 日高道を

八位 星野和葉

節代

章嘉

かつ子

鶴城

喜恵

修

徹雄

和葉

秀子

公子

久美子

輝翠

真理

更穂

美智枝

昇

延昭

チアキ

風子

第三日 (七月三十一日)

保坂翔太

猛暑の中、三十四名が出席して開催された。席題は「夏深し」と「目」の詠み込みで、三句の投句の後、句会が開始された。

主宰詠

元・海女仕切る夏たけなはの浜料理
糸を張る老妓の眼夏ふかし
曾祖父の剣の目録はたた神

主宰選

目一杯に立ちはだかるや入道雲
夏鴨の目を閉ぢ夢想沼の淵
雲をひく武州の地平夏深し
夏深し扉の重き無言館
輪島塗の盆に籠目の切子かな
目に入れてみたき娘よ水遊び
日の盛り枉目の下駄の緒が弛む
夏休目礼交はず初恋の人
いま一度五体に力を夏深し
白南風や目を見てものを言ふ少女
夏深し夜空に浸みるホルンの音
夏深し路面電車の軋む音
佳人注ぐ蛇の目の猪口の冷酒かな

公子 徹雄 京子 千祐 延昭 和葉 山菜 鶴城 卓郎

色悪の流し目に酔ふ夏芝居
再上映の「駅馬車」目ざし銀座夏
夏深し無人駅舎の時刻表
夏深し千年杉の仁王立ち
腰掛くる袖の切株夏深し

以上特選

夏深し明日は湯舟に入ろうか
流れゆく雲の変貌夏深し
源氏絵の引目鉤鼻夏深し
夏深し眠れぬ夜の中也詩集
夏深し今日一日の座禪かな
夏深し暈目測る名無し指
草ばうばうを庭師完璧夏深し
炎天や目眩とともに夫が見ゆ
難問の解けぬまに過ぐ夏深し
夏の夜の囲碁の一目勝負あり
遠目にも胸の躍るや揚火花
せせらぎに鳥の声乗せ夏深む
果実酒の古りて琥珀に夏深し
目配せを見えぬ振りして蛍狩
流し目で誘ふ新宿夏の宵
目が合へば「暑いですね」と炎天下
夏深し若かりし日の日記燃す
夏深し戦の行方見えぬまま
山越ゆる水色の風夏深し
継ぎ目なく極暑襲ふや御師の宿

マスミ 節代 喜恵 翔太 桂子 かつ子 道嘉 月を 美智枝 真理 久美子 美子 宣子 静香 稀香 更穂 風子 チアキ 輝翠 延昭 鶴城 卓郎

夏深し風の淀みし隅田川
夏深し次々去りし湯治客
川をさめの花火間遠に目にとどむ
夏深し浜辺に拾ふ虚貝
目配せでいつの間にやらビヤガーデン
夏深しヨーデル響くアルプス嶺
明易し翳み目こすり文字を追ふ
団扇の手休め目力強めたる
番町の面目然り泥鰌鍋
夏深し群青色の時流れ
硝煙と流民の地球夏深し
保育器の稚の目差虹立ちぬ

互選による第三日の高得点者は左記の通りであった。

一位 保坂翔太 二位 石井喜恵
三位 丸山マスミ 四位 五明 昇
五位 境 延昭 六位 本橋稀香
七位 森下山菜 八位 曲淵徹雄
(天) 五明 昇
(地) 染谷風子
(人) 石井喜恵
超特選五名(大村節代、網野月を、境延昭、小林京子、日高道を)には主宰句の色紙が授与された。特選七名(石山かつ子、梅澤輝翠、青木鶴城、河野はるみ、皆川更穂、保坂翔太、曲淵徹雄)には主宰句の短冊が授与された。

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭
茂木和子 報

よるめきの洒落にもならず夏の風邪

由紀子

物影の際立つ朝や梅雨晴間

京子

大物になれとたつぶり天瓜粉

徹平

朝明けの庭の初物冷し汁

和葉

この瓜は証拠物件食べるなよ

節代

物売りの歌舞伎踊よ絹団扇

延昭

奴さんのやう物干し竿の甚平

節代

夏風邪の妻の物臭出前ビザ

延昭

聞き役もうはの空なり夏の風邪

マスマ

地盤ゆれ物価高騰夏至の雨

はるみ

夏風邪や夜更し朝寝して電話

徹平

夏の風邪か細き声に騙される

節代

まどろみの寝首かかれて夏の風邪

由紀子

計らずも寝込む羽目なり夏の風邪

チアキ

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

夏風邪の子に禁じ手のスマホかな

稀香

虫干し終へて物相飯を妙心寺

千祐

転た寝てふこの世の宝夏の風邪

和葉

夏風邪の子にうかうかと七並べ

舎人

差し歯抜け炎症からの夏の風邪

拓真

梅雨晴れや万物に色戻りたる

順子

涙目のうるうる夏の風邪ひきぬ

和子

七夕や星座めきたる視野検査

竺仙

柏手に老鷲神となりたまふ

〃

向日葵や背高き子の固き脚

いちい

句仲間の遺作に返句雲の峰

敏江

夏休み果てて宿題やつと終ふ

以上特選

向日葵や母子寮といふ高き塀

敏江

向日葵や心俯く日もありや

みどり

向日葵や心俯く日もありや

いちい

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄 昇 報

二の腕の日焼自慢や夏休み

峰雄

楠と対峙猛省夏休み

りこ

向日葵の照るも俯く反抗期

竺仙

湯やの壁「凱風快晴」夏休み

士史

ひまはりや隣国の愛は偽り

鶴城

溶けてゆく麒麟の編目梅雨じめり

萬蝶

梅雨夕焼常世の国を垣間見る

〃

夕焼を背にして下る山男

星歩

不意打ちの瑠璃の煌めき夏の蝶

徹雄

大夕焼わが青春のヴィヴィアンリー

順子

レガッタの櫂のようそろ雲の峰

昇

大南風島に往古の大鏡

〃

放課後の延長にある夕焼かな

以上特選

夕焼に航跡一筋鷗飛ぶ

石川理恵

影踏みもせずに夕焼塾通ひ

杉浦千祐



モーゼの割りし海の如しや夕焼雲
 吉右衛門の鬼平恋へば梅雨夕焼
 西日中老人ホームの閉ぢし窓
 夕焼や都会の隅の貸農園
 竜子の墓茅舎の句碑や苔の花
 大夕焼議事堂ミニチュア玩具かな
 養魚場に夕焼掬ふつなぎ服

順子 萬蝶 徹雄 雅夫 康世 喜久 昇

第四例会 (浦和)

境 延昭 石井 喜恵

夏霧や馬の背越を行く歩荷
 汽笛の尾沖に揺るるや夏の霧
 夏の霧ぬうつと迫る馬の鼻
 夏霧に濡れて渚を魚のごと
 鳥つなぐ大吊橋を海霧が呑む
 吊橋のみるみる深し夏の霧
 夏霧に牧羊を呼ぶ島言葉
 夏霧にまかれ山姥出てきさう

マスマミ 恵子 寛治 延昭 玲子 昇

てんとむしマドンナ喜寿を迎へけり
 天道虫めだちたがりの君が好き
 原発の瓦礫も隠す夏の霧
 夏霧衝く面貌固き救助隊
 ひたひたとハイカー襲ふ夏の霧
 鳥声の合図夏霧晴れそむる
 ヘッドライトに頼り山路を夏の霧
 夏霧や木道の人みな寡黙

以上特選 翔太 光子 曆文 昇 修 由紀子 玲子 でん治

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 河野はるみ

花莫塵にままごとめきし日日のこと
 花莫塵の赤い花摘む女の子
 花莫塵の花に抱かれて眠りけり
 ひとの香を恋うてうとうと夏の宵
 花莫塵の藍に白波立つ心地
 夏の夜の最上階の予約席

千祐 美佐尾 水尾 はるみ 佐江

花莫塵に絵本一冊残されし
 花莫塵の花に乗り上ぐミニ電車
 花莫塵や四方山話夜が更ける
 指で撫で足裏でめづる絵莫塵かな
 暮れかかる湖の静寂よ夏の宵
 焦がれながら關待つ二人夏の宵
 勝ち方に美学の棋士や夏の宵

以上特選 宣子 義子 美佐尾 水尾 千祐 佐江

若松例会 (京橋)

正木 萬蝶 石田 慶子

親族会常ならず濃き虹の空
 梅雨晴間こころと干して子沢山
 鉄線花母の手沢の母子手帳

ひろこ 稀香 マスマミ

日高野の夕虹映す種牡馬の眼
 沢登りみやげは魚籠の花山葵
 水高の増しゆく沢や遠郭公
 登山靴まづは試しの沢登り

佐江 はるみ 鶴城 慶子

虹消えて身の内に虹架かりたり
 夏霧のしつとり包む鳥羽の里
 虹立つや虚子と愛子の相聞
 大虹の涙たゆたふにはたづみ
 飛行機雲を追つ掛け虹の二重かな
 虹立てりクレイン二機のプロローグ
 朝虹の揺れ見逃さず風見鶏
 夕虹や保健室にはあと一人
 夏燕急降下して駅舎入る
 沢渡る老鶯の声さやかなり
 アイライン引きぬ車窓の虹を見ず
 荒南風や跡目危ふき澤瀉屋
 妻留守の端居にどんと「沢の鶴」

以上特選 月を マスマミ 佐江 鶴城 慶子 ひろこ 千春 稀香 星歩 千祐 京子 萬蝶

関西例会 (大阪)

森本 早苗

蛇の衣天空の城閣深し
 妣の声教へこまれし半夏餅
 一本の大樹野中に夏の雨
 猫走るほうせんかの種弾かせて
 公園に眠る機関車蟬しぐれ
 峰雲へとどく喚声ホームラン

玲子 千津子 ゆら女 洋子 和子 道子

万葉の池をピンクに大賀蓮
お稽古の生けて風生む青芒
半夏生紙をくはへて太刀手入れ
心太六十余年のランチ友
露草の露を集めて一筆画
今日よりはちびりとすべし冷し酒
夏霧の大トリックや六甲消ゆ

千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
嶋田洋子
迪代
早苗

昔話あれこれ 30

雄略天皇への報復

顕宗天皇は、我が父を殺した雄略天皇を深く恨んでいた。しかし報復するにも今は亡き人だから、その御霊に報復するしかない。そこで、雄略天皇の御墓を壊そうと思った。そのために人を遣わそうとした時、
兄の袁祁命が、「その仕事には他人を遣わしてはなりません。私が参って天皇のお考えのように、御墓を壊してまいりましょう。」

と奏上し、河内の多治比にある御陵に行った。

袁祁命は御陵の傍らの土を少しだけ掘って
「御陵を掘り壊してきました。」と報告した。

顕宗天皇は、兄上が早く帰って来たのを不思議に思い、「どのように壊されたのですか。」と尋ねた。

袁祁命は、「御陵の傍らの土を少し掘りました。」と答えた。

天皇は、「私達の父の恨みに復讐するなら、御陵をすつかり壊すべきでしょう。どうして少しだけ掘ったのですか。」と尋ねた。

袁祁命は、「父王の恨みを雄略天皇の御陵に復讐しようと思うのは父子の情として当然です。雄略天皇は父の仇ではあつても、一方では、我らの従父（おじ・雄略天皇と市辺の忍爾王は従兄弟であるから、二皇子には従父にあたる）であり、天下を治めた天皇です。父の仇という点

にだけ固執して、天下を治めた天皇の御陵を壊したなら、後世の人々はきつと非難するでしょう。ただ、父王の恨みには子として復習しないわけにはまいりません。そこで、傍らの土を少し掘って来たのです。このような恥辱を与えたことと、報復の志を示すことが出来るでしょう。」と奏上した。

天皇は「それも、大きな道理です。兄上のお言葉のとおりで結構です。」と答えた。

顕宗天皇は八年間天下を治めた。
宝算は三十八歳である。

仁賢天皇

顕宗天皇亡き後、兄の袁祁命が、石上の広高の宮で天下を治めた。仁賢天皇である。御子は七名で、その中の小長谷の若雀の命（武烈天皇）が天下を治めた。

* 仁賢天皇の皇統譜には、宝算、もしくは在位年数、また御陵の記事を欠く。

（つづく）丸山マズミ

各地句会



りんどう俳句会 (浦和)

南風呼吸生き生き天地人

白南風や渚を走る介助犬

白南風や句帳片手に立つ舳先

英霊が「水をくたさい」八月来

どつと沸くビーチパレーや南風吹く

水筒をラッパ飲みする夏の昼

夏椿こりと落つる手水鉢

落ち実梅拾ふわらべの蒙古斑

総帆に南風はらませ日本丸

水明熊谷句会 (熊谷)

暑氣払新人類の無礼講

夏蔭やダム湖に映る山の影

二つ三つ馬齢鯖よむ暑氣払

片蔭の先を白衣の修行僧

暑氣下し百味筍筒に犀の角

弘治夫 徹雄 風子 君夫 翔太 まり子 卓郎 順子

片陰を試歩の歩幅の杖を曳く
酒を酌む夫の名目暑氣払
手庇をやつと解きて片かけり
雛の会 (浦和)
朝の雨降り残したる鳩浮巢
大空の星の称へる鳩浮巢
浮巢ある利根の中洲が流されさう
分解の始まりさうな浮巢かな
鳩の浮巢黄の嘴の賑賑し
篠突く雨に鳩の浮巢のよるべなき

燈女 栄子 茂子 喜恵 チアキ 燈女 公子 輝翠 佐江

常備菜にふと疑念わく半夏生
絵説法掲ぐ山門青葉閣
木下闇ぬつと顔出す大男
木下闇池のほとりの無縁仏
半夏生ルバーブ刻みジャム作り
下闇や神の在す気配せり
半夏生さみどり揺るる田に夕日

玲子 ひろこ 道を 俱子 啓子 重子 山遊 藻好

芽吹句会 (浦和)
今日を生き日々を新たに日日草
産院の入口飾る日々草
ビイドロのなよび姿や歌舞伎町
庭先に五色の競ひ日日草
ギヤマンにフルーツ盛られトロピカル

朋子 裕誌 克之 富子 文子 あつ子 千重子

珊瑚の会 (浦和)
ミシンに背凭れて母の端居かな
白玉やはんなりやんはり京言葉
夕端居昔は昔今は今
母いつも座りし跡や夕端居
白玉の手工品のやうに浮いてくる
ギター復習ふ音の洩れくる夕端居
白玉や日照雨過ぎ行く峠茶屋
遠富士のまだ暮れきれぬ夕端居
望郷の端居に高さ一つ星
母と並び端居つれづれ遠い空
白玉や絵巻の美女は下膨れ
将棋盤据えて人待つ夕端居

史代 広子 和子 和葉 かつ子 喜恵 マスミ 水尾 昇 光子 恵子 節代

蝸 蚪 の 会 (浦和)

山の辺の茶屋の縁台冷素麵
流れきて箸に一本冷素麵

握手しても票にならざり冷素麵

冷素麵ひよつとこ面の留守居番

簾越しの風のまろさや沖遠し

簾越しみな美男美女宵祭

しつらひの決め手は青き玉簾

冷素麵サインコサイン箸と樋

離れ屋の夜の賑はひ掛簾

溪流を眼下に茶屋の冷素麵

芙 蓉 句 会 (浦和)

噴水に暫し心を委ねけり

悠悠と参道渡る青大将

噴水に煌くネオン艶めきて

噴水の曲に合はせて躍り出る

櫻 蔭 句 会 (浦和)

溪流にさらり岩魚の尾の朱色

淵に潜み猛悍隠す岩魚の眼

夕間暮朝顔市の万華鏡

どんどん運びどんどん売れる朝顔市

入谷街朝顔市は江戸風情

色良しと選ぶ楽しさ朝顔市

団十郎の色に惹かるる朝顔市
色さがします声も華やく朝顔市

焼岩魚酒を泳ぎて香り立つ

佳きひとを訪ふがに父の岩魚釣り

心地よく江戸の風吹く朝顔市

阜 月 の 会 (浦和)

弱点は顔の良きこと梅雨鱈

あの時のまた来る期待走馬燈

梅雨明や下校のチャイム晴れやかに

陰膳やひとりに慣れて走馬燈

毎朝の亡夫との会話走馬燈

ITに弱き暮らしや蚊遣香

弱虫と言はれ泣く子にてんと虫

甚平の似合ふ客かな異邦人

客寄せのビールの泡の黄金色

梅雨の明ガレージセールでアロハ買ふ

りそな俳句会 (浦和)

日盛や人影のなき船溜り

日の盛り息潜めたる旧街道

日盛や小さき日陰の立ち話

日盛りのソック千本バケツ水

車椅子押す肩先に百日紅

日盛やパレードを待つ人の黙

電柱の影にもずがる日の盛り

美智枝
真理

千恵

由紀子

幸代

山菜

更穂

光代

珪子

順子

紀子

静香

曆文

美佐尾

さいち

マスミ

寛治

曆文

建治郎

久美子

道を

雅夫

青 葉 の 会 (浦和)

向日葵の揃ひ太陽追ひかくる

夏の夕湖岸に立ちて落日を

雨上がりに岸辺の家の夏柳

向日葵の迷路に消えし二人連れ

向日葵描くやゴッホの魂を塗り込めて

岸壁を覗き曇りの吹つ飛びぬ

片蔭に吸ひ込まれるやブラックホール

向日葵をぐるりと咲かすそれほどに

きざきサークル (浦和)

鳥遙か卯波逆巻く美保関

夾竹桃日の本強くどっこい生きる

破られし記録保持者の顔涼し

夾竹桃戦死の父は輜重兵

檄飛ばす森保一夏の陣

絶叫の保津川下り雲の峰

返答に窮し団扇に逃れをり

ペデイキュアの跣駆け来る三保の浜

野 菊 の 会 (与野)

百穴を密封したる夏濃霧

寿の米寿の席や緑の夜

炎天をやうやく逃れハープテイー

洗ふたび肌リネンのなじむ夏

美智枝
真理

美智枝

美子

啓子

洋子

和子

輝翠

昇

光子

和子

俱子

和枝

健司

啓子

和子

美代子

和子

清子

光子

若狭水明会 (若狭)

狛犬の阿の口塞ぐ苔の花
 境内の靴の音消す苔の花
 湧き出づる水の飛沫に苔の花
 蟻の引くばんの欠片や四阿の昼
 苔の花奥千本の薄明かり
 母と子の跨いで通る蟻の道
 クラシック聞きジャズ聞く日あり苔の花
 陽光を集め古木の苔の花
 蟻の列口に唾へる当たり棒
 やんちやな子踏み散らかすは蟻の列
 そおろりと蟻踏まぬよに歩く吾子
 作務僧に箒を置けと旅の蝶
 鶴川山百合句会 (町田)
 梅雨に厭きラクンパルシート踊らう
 子は母をそのまた母を実梅落つ
 さくらんぼ問ふも問はるも出羽訛
 タイタニック号の沈む暗闇梅雨ふかし
 梅雨晴れや弓手に残る指輪跡
 荒梅雨の宅配人の駆けてゆく
 負けん気は母親に似て羽抜鶏
 修復家の眼炯羽抜鳥軽軽
 二度見するほどの憐れよ羽抜鳥
 婚活も一時休止す羽抜鳥

郁子 祥子 和風 保人 白鷺 初花 鼓
 八重子 ことは 登美江 友夏 寛久
 雄二郎 月を 喜久 史代 広子 由美子 千春 萬蝶 千祐 美千子

若枝句会 (浦和)

マリオネットのヴィオロン奏つ梅雨晴間
 向日葵に宇国の百年かさね視る
 願掛けて好物食す土用入り
 母が居て父も居る家帰省かな
 帰省子の駅舎に消ゆる背ぞ哀し
 帰省子の影も踊りて道の駅
 八重咲の向日葵手向け父徳ぶ
 真つ先に犬が尾を振る帰省かな
 水明鬼石句会 (鬼石)
 キーウイ蔓引けばこぼるる夏の空
 ひさびさに夜店の味を楽しんで
 店仕舞はや十余年古団扇
 山茶花 (浦和)
 幼名で呼び合ふ仲間ビアガーデン
 奥入瀬を流れにそいて夏木立
 茄子漬や父に似て来る子の仕種
 水明澤つくし句会 (大阪)
 くちなしの香り重たく雨催ひ
 くちなしや艶間巻みて蕩けたり
 吾の駄句を下げて風鈴音色よし
 大川の水面をわたる祭笛

玲子 泰生 敏江 貞代 美佐子 泰子 みどり 徹雄
 和子 ナヲ子 聡子
 マスミ 美江子 綾子
 智恵子 人美 洋子 ゆら女

繭の会 (浦和)

夏山や大巖肌に水のみち
 持つてけと差し出す花に蟻のをり
 夏山や空鈍色に染まりゆく
 放れ蟻美食家の手を知りにけり
 波音がすぐそこにある夏の宿
 一匹の蟻幾人を励ますか
 夏山を歩く修行のごと歩く
 異次元の不妊カースト蟻社会
 倒木に青苔茂る大平山
 分け入れば獣の匂ひ夏の山
 アスファルトに蟻の斥候の爪先立ち
 大蛸や霊の目覚むる難破船
 葉は流れ行方不明の蟻二匹
 野ばらの会 (浦和)
 本日は縦走日和青き嶺
 空続き夏嶺も続く小さき我
 夏山の聳ゆる離島風強し
 山祇の棲む若狭路や夏の山
 勢良くふくらむ姿夏の山
 光が丘俳句教室 (東京)
 対峙する超高層と雲の峰
 雲の峰ゴジラはイヌに呑み込まれ

珪子 小麦 夕峰 風舎 悦子 智子 まりこ 比早子 さよ子 風子 月を 鶴城 京子
 秀子 夏江 栄子 茂子 みき子
 はる 千祐

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

ギヤマンの瓶こそよけれ紅の花
母真似て化粧する子や紅の花
峰雲や火の見櫓に避雷針
地曳網雲の峰よりたぐり寄す
回診の白衣まぶしき薄暑かな
スタンドに響動もす凱歌雲の峰

延昭
健司
美枝子
俱子
俊晴
昇

新樹の会(浦和)

逆夢に足元絡む夏蒲団
陸前の沖に逆波やませ吹く
肌脱ぎて白き禪太鼓打つ
諸肌を脱いで砂丘の昼餉かな
父ひとり片肌脱の晩酌を
秋近し湖面に大き逆さ富士
肌脱の縁台将棋焼さするめ

清吉
風子
平通
徹雄
道修
鶴城

俳句の手ほどき(岩槻)

紺暖簾そよりとせぬ日の盛
瀬戸内の潮路遙かに日の盛
日盛や振り時計が昼休み
「銀恋」の発車メロデー梅雨あがる
最多出勤この日盛りの救急車
日盛りの子供囃子や路地通る
日盛の鎮もる家や東武線

水尾
義子
翔太
徹平
忠男
美子
久美子

車座のキャンプファイヤ夜の浜
車座を葉缶でまはす芋焼酎
日の盛り上ル下ルの京の町
日盛や涙を拭ふ映画館
とうふ屋の喇叭たからか日の盛り
車窓から眺むる赤城山紫黄の忌
日盛や松山杉山銚正す

桂子
延昭
佐江
幸代
卓郎
俊子
かつ子

婆だけがおいでけぼりの海開き
文庫本一氣に読破外盛夏
三つ編みの巫女の黒髪神涼し
お白洲に並ぶ編席夏芝居
白帆より航跡白き盛夏かな
海開き解き放たれし子の手足

福美
小麦
小義
鶴城
水尾
静香

和歌山水明句会(和歌山)

貝風鈴遠き潮騒恋ふて鳴る
曳き売りの残す鱗朝曇
田植終へ婆さまドレス新調す
青簾ベットボトルの空増ゆる
止り木の上段さらふ羽抜鶏
降水帯に悪魔なす川夏の雨
佳き知らせ奈良のお寺の双頭蓮
水馬は飛んで蜻蛉になるつもり

和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
洋子
迪代

地ビールを飲む浜の番長こと萬蝶
麦酒の泡を髭に見立てて父忍ぶ
丹精をこめしクラフト黒麦酒
料亭の野点の傘に夏の膳
二次会は君と二人の缶ビール
新しき傘と長靴梅雨たのし
喜びも哀しみも泡ビール干す
三本締め終ればビール一気飲み

史代
栄子
詠子
玲子
慶子
美千子
萬蝶
千春

神戸大池句会(神戸)

老鷲や山に溢るる鳥語聞く
沙羅咲くと届くメールや摩耶の坊
ささゆりや友退院の報せ受く
たかなな俳句会(川口)

千津子
玲子
早苗
謙一
のり子

日盛や手水にならぶ竹柄杓
後輩の起業の知らせ日の盛
一斉に朝の挨拶日日草
デパートの正面玄關日の盛
日盛の山の喧騒立石寺
日盛や貨物列車の長長と
日盛や必死のペダル刺身買ふ

六弦
とも留
知子
月を
鶴城
はるみ
美智

円卓の会 (浦和)

床の間の漆喰は青夏邸

夕涼みスローライフの長寿村

炎天に稚児凜として京の町

帰省子や屋号呼び合ふ国仲間

九十年を息衝くビルや五月闇

炎天や時空の止まる街の午後

不可逆の恋の行方と夏休み

炎天や「ハッピー泡」目指して来

炎天や幽体離脱せし記憶

柿の木塾 (浦和)

暁鐘や白鷺の散る千枚田

ダリア大輪殺し文句は耳もとで

白鷺の一步一步の歩みかな

白鷺や大樹の上の威厳さよ

射程距離あけて白鷺舞ひ降りる

在のダリア色鮮やかに逞しく

白鷺の動けば動く水鏡

渾身のダリアで飾るマイホーム

落日に溶けてしまひぬダリアの炎

若鮎句会 (浦和)

明易し宿の湯殿の静かなり

麦酒つく我が領域を定めたり

京子

輝修

翔太

静香

道香

拓真

月を

鶴城

昇

かつ子

和葉

章嘉

節代

恵子

水尾

俊晴

和子

芳春

拓真

短夜や微笑む夢も半ばなり
短夜や薄墨の名の滲みゆく
いつの間に麦酒飲み干す娘かな
欠伸して心かよはず薄暑かな
明易の大谷翔平シヨウタイム

香音子
さなえ
秀子
紀子
稀香

「取り敢へずビル」は仲間の合言葉
銘柄どんぴしや到来物の缶ビール
為すことの多き一日明易し
「シーユー」とビール片手に言葉飲む
順子
月を
鶴城
夫

水明通信

二つの「黒門」

慶応四年の彰義隊上野戦争について
語る時、人は下谷広小路口の寛永寺総
門の黒門を思い起こす。この付近での
白兵戦が数多の錦絵に残されているか
らだ。この黒塗りの弾痕だらけの門は、
明治四十年、三ノ輪の円通寺に移設さ
れ、彰義隊士の墓を守るかのように設
置されている。

上野公園にはもう一つの黒門があ
る。上野戦争で寛永寺の諸伽藍は焼失
したが、本坊の表門だけが焼け残っ
た。本坊跡に帝室博物館（現国立博物

さいたま市 染谷風子

館）が建設され表門はその正門として
使われた。関東大震災後、本館改築に
伴い寛永寺に返還され、科学博物館の
裏、国立博物館の東隣に移設された。
切妻造、本瓦葺、三間薬医門で国指定
の重要文化財である。黒く塗られてい
たため黒門と言われていた。門扉に直
径十センチの砲弾穴二つ、二センチ程
の弾痕が数多あり、戦闘の激しさを残
している。興味ある方の一見をお勧め
する。

「りんどう忌」のご案内

[日 時] 2023年9月29日(金) 午前11時受付 午後1時開会
(8月号でご案内した受付時間等が変更になっています。)

[会 場] さいたま共済会館 501号室・502号室

[投句締切] 午前11時45分

[兼 題 等] 2句 兼題:「りんどう忌・かな女の忌」および「葛の花」

[会 費] 2,000円(昼食・飲み物は各自で持参してください)

[申 込 み] 9月22日(金)までに巻末添付の申込書に会費を添えて発行所総務部へお申し込みください

※申し込み無しの方の入場は出来ません。なお、状況に拠っては、内容を変更する場合がございます。

◎今年(令和5年1月~12月)米寿(88歳)および喜寿(77歳)を迎えられる方でりんどう忌参加者に記念品を贈呈致します。申込時に自己申告してください。 事業部

特 集 現代俳句と「秋の暮」―作品競詠

特別企画 思い出の吟行

巻頭作品10句

岩岡中正・小川軽舟・鹿又英一
関森勝夫・鳥居真里子・能村研三
原田紫野・村上尚子

俳壇

10月号

9月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
横澤放川

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅲ期」…佐怒賀正美・武藤紀子

連載

俳人の住む町…高崎公久・宮谷昌代
俳句文法 そのが問題そのがポイント…井上泰至
名句のしくみと条件…坂口昌弘
私の本棚・私の一冊…長島衣伊子
十二か月添削教室…前北かおる
俳書の森を歩む…栗林 浩

俳句と随想12か月 井上論天・清水和代

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03(3294)7068 振替00100-5-164430

風 声

○現代俳句七月号——「現代俳句の風」欄

稜線の構へ盤石聖五月

滑走路に飛べない蟻が曳く片羽

音頭取る鳶の頭や夏座敷

背割れて急発進のてんと虫

アカシアの花散る夜の甃

ひとと止むダムの放水二重虹

敵將の髻むんず夏の草

○天塚（宮谷昌代主宰）七月号——「珠玉一句」欄

腕ひろげ乗込鯛を待つ男

○饗焰（米田規子主宰）七月号——「一誌一句」欄

嫁入り舟通ひし川の水温む

○くぢら（中尾公彦主宰）七月号——「受贈俳誌美術館」欄

夏帯に漆細工の根付かな

○幻（西谷剛周主宰）七月号——「受贈誌拝見」欄

逃水に背中見すれば追ひくるか

○好日（高橋健文主宰）七月号——「受贈誌御礼」欄

洞上げの着地を飾るいぬふくり

○新月（松田碧霞代表）七月号——「受贈俳誌紹介」欄

腕ひろげ乗込鯛を待つ男

○雪嶺（石本雪鬼主宰）七・八・九月号——「受贈誌」欄

人間が神を演ずる里神楽

池田雅夫

五明昇

染谷風子

原田秀子

茂木和子

大橋旭代

由良ゆら女

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

初蝶を招く鼻欠け地藏尊

○太陽（吉原文音主宰）七月号——「受贈誌御礼」欄

道すがら聴きゐる話春しぐれ

○玉梓（名村早智子主宰）七・八月号——「他誌拝見」欄

篋や春の眠りを誘ふ風

○菜の花（伊藤政美主宰）七月号——「諸家近詠」欄

荷風忌や万年筆の掠れ癖

○ひいらぎ（小路智壽子主宰）七月号——「現代俳句の鑑賞」欄

岸本隆雄氏の鑑賞により

回転ドアを入れど出られず春の昼

山本健吉は「切れ字の再認識」「季題の本意の再考」とも

もに俳句固有の方法として「滑稽・挨拶・即興」の三つを

明示した。くるくる回る回転ドアにやっとな飛び込んだもの

の今度は出るに出来ない、春の昼に夢を見ているような

のどかで愉快な季節感の鋭敏の佳句、愛嬌があつて可笑し

い。

○筈（山本一步主宰）七月号——「受贈誌の一句」欄

今朝の雨ひそと艶めく白椿

轉りや道なき道に誘はれ

菅原真理

元田亮一

（日高道を抄出）

水明発展基金御札

(敬称略)

— 令和五年七月三十一日現在 —

岡田宣子	山中みどり	山口富子	井上玲子	笹本啓子	匿名	渋谷さいち	後記朝香
10	12	3	15	2	30	3	3
□	□	□	□	□	□	□	□
葛城千世子	南條さわゑ	高原和子	大橋旭代	高橋満耶子	川崎道子	十倉和子	鳥羽和風
5	5	3	10	5	10	10	30
□	□	□	□	□	□	□	□

夏行より

染谷風子	菅原真理	青木鶴城	日高道を	西幅公子	梅澤輝翠	曲淵徹雄	野田静香	反町修
2	2	2	3	1	2	2	2	2
□	□	□	□	□	□	□	□	□
石山かつ子	大村節代	石井喜恵	森下美智枝	小林京子	河野はるみ	田中章嘉	星野和葉	—
2	2	1	1	2	2	3	2	189
□	□	□	□	□	□	□	□	□
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。希望者は、左記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

〔指導者〕 網野月を

〔作品〕 5 句 〔受講料〕 1、000円

〔方法〕 ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記

③84円切手同封 ④返信用封筒は不要

⑤締切なしで随時受付

〔送付先〕

網野 月を 電話080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

誤植訂正 慎しんでお詫び致します。

八月号三九頁下段

正 黒髪に金糸編み込む聖夜かな

誤 黒髪に金色編み込む聖夜かな

八月号六一頁下段

正 創刊者田中万次郎氏は生涯「鶴」の同人

誤 創刊者田中万次郎氏は生涯「鴨」の同人

後記

今月号は全国大会の特集号です。裏表紙は、受賞された皆様が花束を持って、主宰を囲んだ笑顔の写真です。

今年の全国大会の会場は「さいたま共済会館」で行なわれました。昨年、全国大会を挙行したパインズホテルのような豪華さは無いけれど、アットホームな雰囲気の皆様、くつろいでいるようにお見受けしました。

大会の折には、主宰からかな女賞はじめ六賞の方の表彰、新季音同人、新同人になられた方々への委嘱状の授与等が行なわれた。

その後、兼題の入選句の発表と講評を、主宰から詳しく頂きました。本号では、当日、発表頂けなかった佳作まで含めて、全ての句を掲載しました。

以前お配りした全国大会の全投句表は、出来るだけ皆様の投句のままを原則としています。ところが本号の入選句では、送り仮名等

を、主宰が直されたり、編集部で直したりしている場合もありますので、大会資料と異なる時もありますのでご了解下さい。

また、夏行が七月二十九日、三十日、三十一日と今年は久しぶりに三日間でした。猛暑にもかかわらず、多数の方がフーフー言いながら、ご参加になりました。

恒例により、夏行は高得点の方が当目の記事を書く事になっていきます。本文をお読み下さればお分りでしょうが、第一日・日高道を氏、第二日染谷風子氏、第三日保坂翔太氏、そして⊕五明昇氏、

⊕染谷風子氏、⊕石井喜恵氏です。何んと喜恵氏以外は全員男性でした。来年の夏行は、女性の皆さんがもっと参加されて、男性を凌駕されます様に。

処暑も過ぎ、間もなく白露、秋分ですのに、何という暑さでしょう。ハワイはじめ世界のあちこちの山火事に戦慄を覚えます。その上感染症も脅威です。皆様、お体ご自愛下さい。

(節代)

今月のはてな？

- 喫驚(びっくり)
- 紋羅(もんら)
- 海蛸(ほや)
- 鱗(うろくず)
- 弄(いじ)る
- 天蓼(またたび)
- 蟾蜍(ひきがえる)
- 誑(たぶら) かす
- 蕃椒(とうがらし)
- 墜栗花(ついでり) 雨
- 諄(くど) くない

水明発行所受付時間
 (048-822-4741)
 曜日：(月・火・水・木・金)
 時間：12時半～午後4時半
 (土・日・祭日は休み)
 水明の行事と重なった時は休み
 (上記の時間には係がおりますので、
 ご用の方は 時間内をお願いします。)

水明

令和五年九月号
通巻一一一六号
令和五年九月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二
電話 048-822-4741
ホームページ 「水明俳句会」で検索

誌代	半年分	六、〇〇〇円
	一年分	一一、〇〇〇円
同人費 (誌代を含む)	一年分	二四、〇〇〇円
季音同人費 (誌代を含む)	一年分	三〇、〇〇〇円
振替	〇〇一七〇一〇一九三九三	
発行人	山本 鬼之介	
印刷所	中央美版	

令和5年「りんどう忌」

参加申込書 〈申込締切 9月22日〉

研修会 9月29日(金)	会費 2,000-	出席します
--------------	-----------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※8月号でご案内した受付時間・投句締切時間が変更になっています。

◆米寿(88歳)および喜寿(77歳)を迎えられる方は自己申告してください。

・米寿を迎えます	・喜寿を迎えます
----------	----------

※「米寿を迎えます」「喜寿を迎えます」を○で囲んでください。

上記参加費を添えて申し込みます。

2023年9月 日

住所	〒		
氏名		電話	()

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)

水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

電話番号	()
電話所有者	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時に使用し他の用途には使用いたしません。

季音抄

山本鬼之介

白鷺の一步一步の歩みかな
夏館螺子を巻き足す大時計
夏の霧六甲連山掻き消しぬ
青芒少年海へひた走る
花火果て闇深くなる隅田川
明日の元氣祈りて寝入る遠花火
花莫塵の藍に白波立つ心地
真夜に覚め水音涼し京の宿
夫の座に置きたつぷりのアイスティー
鬼やんま夫の貌して低く飛ぶ
溶けてゆく麒麟の網目梅雨じめり
瀬戸内の潮路遙かに日の盛
二人居の風と思へば団扇かな
水琴や町家の奥の夏座敷
炎天や時空の止まる街の午後
日盛や微動だにせぬ遊具たち
水盤の余白に入るるさざれ石
自転車の籠にウクレレ盛夏来る

星野和葉
茂木和子
森本早苗
矢作水尾
山中みどり
柚木治子
梅澤佐江
大場順子
松井由紀子
井上燈女
正木萬蝶
森川義子
青木鶴城
檜鼻ことは
日高道と
河野はるみ
笹本啓子
野田静香

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

琵琶胸に飛天の笑みや梅雨の闇
 名水を育む山の緑濃し
 螢狩そつと肩借り目を凝らす
 万緑を駆けて駆けてや日本海
 水音のかすかな誘ひ螢狩
 輕鳧の子の一羽ときをり列乱す
 萍の僅かな隙に射す光
 君去りし海を見てゐる夏帽子
 先の世はおしやべり人か火取虫
 月と戯るる神社の庭の濃紫陽花
 吾の足に蟻登らむと思案中
 剣道場の静かになりぬ桐の花
 闇知らぬ街のはざまの螢狩
 夏雲を仰ぐ老松主顔
 昼寝覚夢に妻子を置き忘る
 青芝に座して語らむ人生論
 河鹿笛往時を遺す芋車
 夏柳水面に映る築地塀

池田珪子
 越田栄子
 清水桂子
 梅澤輝翠
 阿部幸代
 岡田宣子
 菅原真理
 綿引まりこ
 篠崎紀子
 皆川更穂
 丸屋詠子
 小林京子
 菅原卓郎
 山岸久美子
 森下山菜
 新曆文
 西幅公子
 反町修

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和五年九月一日発行 毎月一日発行

(第九十六卷 第九号)

定価 一〇〇〇円